



文化庁委託事業

「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」

平成28年度～令和元年度 成果報告書



独立行政法人国立科学博物館

文化庁委託事業
「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」
平成 28 年度～令和元年度 成果報告書
独立行政法人国立科学博物館

目 次

■文化庁委託事業	
「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」の概要	4
■平成 28 年度事業報告	
●巡回展示とプログラムを通じた地域資源の連携・活用促進事業	5
●巡回ミュージアム in 岩手	6
●地域博物館での研修事業の開発と試行的展開	8
●事業まとめ	10
■平成 29 年度事業報告	
●学芸員等の資質向上とネットワークの構築を通じた博物館の機能強化モデルの提言	11
●巡回ミュージアム in 沖縄「琉球の植物」	12
●国立科学博物館・巡回ミュージアム in 長野・in サヒメル	14
●事業まとめ	16
■平成 30 年度事業報告	
●「出会いと学び」を通じた学芸員資質向上と博物館機能強化モデルの展開	17
●研修の検討にあたっての事前調査	18
●研 修：資料の取扱と修復について	19
●研 修：展示発見カードをつくろう！	20
●研 修：樹脂封入標本の製作と活用にかかる研修	21
●研 修：科学館的ミュージアム・マネジメント（事業点検編）	22
●研 修：博物館施設における多言語化	23
●研 修：博物館の展示制作について考えよう	24
●巡回展：「生命のれきし ―君につながるものがたりー」	25
●シンポジウム：「地域の情報発信拠点としての博物館 ―観光と博物館の連携をさぐる―」	27
●事業まとめ	28
■令和元年度事業報告	
●地域博物館同士のネットワーク構築に関する成果発信事業	29
●「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」総括シンポジウム	30
●レガシー事業を通じて	38
■事業連携機関及び協力者一覧	
	39

文化庁委託事業

「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」の概要

国立科学博物館では、従来から地域博物館への標本資料の貸出、巡回展示物の貸出、震災復興の観点からの「コラボミュージアム」など、地域博物館と連携した活動を行ってきている。しかし、単館では展開数に限りがあること、また連携の効果が実施したときだけの支援となってしまうという課題があった。また、全国の博物館の学芸員等の資質向上のための取組として、学芸員等を対象とした「学芸員専門研修アドバンストコース」や「サイエンスコミュニケーター養成実践講座」等の研修を実施してきたが、地理的な事情、財源的な事情等から研修の参加が困難な館も多く、研修の機会が少ない学芸員等への支援が課題であった。

地域博物館が将来にわたって持続的に活躍していくためには、学芸員等の専門人材の資質向上の機会を提供し、展示やプログラム、標本資料といった各博物館が有する資源を活用して、地域博物館同士のネットワークの構築・充実やノウハウの共有を図ることが不可欠である。

そこで、国立科学博物館は、平成28年度から平成30年度の3か年において、文部科学省委託事業（平成30年度途中からは文化庁委託事業）「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」を実施してきた。本事業では、「自館の財産を再確認できるよう、連携先の博物館の資料を活用した展示を企画すること」「当該展示を地域内の他の博物館に巡回することで、地域内の博物館以外の教育機関等を含めたネットワークを活性化させること」「学芸員研修や学習プログラムをあわせて実施することで、巡回ミュージアム終了後にも連携館にノウハウ等のレガシーが残ること」の三つを目的としている。

国立科学博物館のみで数多くの地域博物館それぞれに展開するには数に限界があること、また巡回終了時にもつながりが持続するためには中核となる博物館が当該地域にあることが望ましいことなどから、事業の実施体制としては、国立科学博物館と中核博物館との連携を軸とする協力体制をとることとした。地域の中核となる博物館と国立科学博物館が連携して、中核博物館での企画展を実施し、その展示を当該地域の比較的小規模な博物館等に巡回することで小規模館の活性化を促すことを目指した。また、研修プログラム等を行うことにより、地域博物館同士、地域博物館と地元のネットワークの活性化を図るとともに、研修のノウハウの共有を図ることで、最終的により多くの人々に博物館活動を届けることも目指した。そして、令和元年度には、これまでの事業まとめとして、各年度事業実施地域での事業結果やその後の成果などを広く発信をした。ご協力いただいた関係機関、関係者の皆さまに御礼申し上げます。

独立行政法人国立科学博物館

平成28年度事業報告

巡回展示とプログラムを通じた 地域資源の連携・活用促進事業

事業概要・目的

地域の中核的な博物館と国立科学博物館が連携し、それぞれの有する博物館資源を活用した巡回展示を行うだけでなく、研修・学習プログラムを重層的に展開することで、地域博物館の活性化や、地域博物館同士、地域博物館と地元のネットワークの活性化を支援し、博物館の振興を図ることが本事業の目的である。

具体的な取組として、以下の二つの枠組みで実施した。

事業1 巡回ミュージアム in 岩手

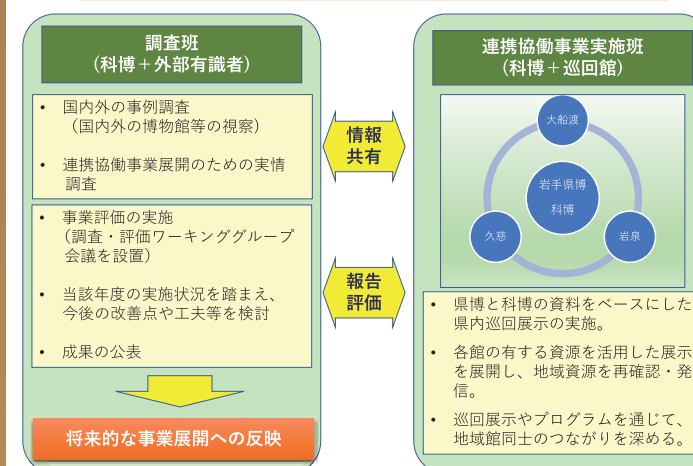
事業1を実施するにあたっては、当該地域で中核となる博物館があること、当該地域をテーマにした展示を直近で検討していることなどから、岩手県立博物館との連携を軸として、展示テーマと合った展開が可能な県内の博物館等との事業連携を行った。モデルケースとして、岩手県内の巡回事業を展開し、県内博物館同士や、博物館以外の団体との連携を深めることで地域博物館の活性化を図った。展示については、地域博物館が所有する県内の重要な地層や化石など、地域資源を活用した巡回展示を行った。

※岩手県立博物館における展示は、「国立科学博物館・コラボミュージアム」として実施。

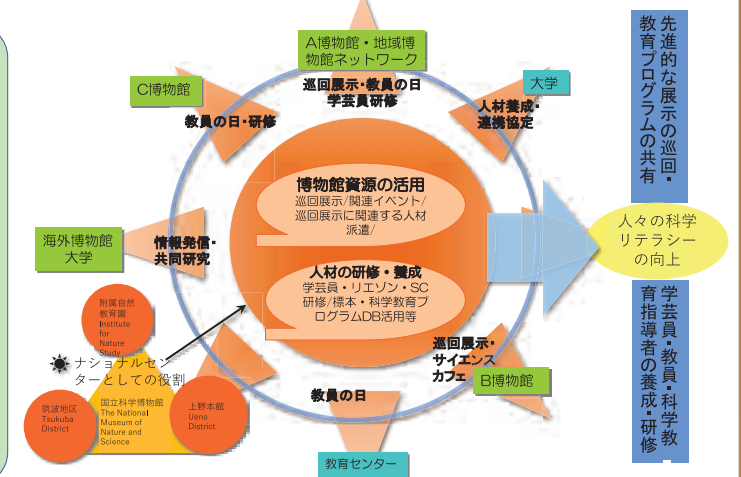
事業2 地域博物館での研修事業の開発と試行的展開

事業2については、地理的な要因もあって首都圏で開催される学芸員向け研修の受講機会が乏しいものの、地元での研修であれば自館のみならず周辺の館も含めて受け入れられるという、帯広百年記念館および沖縄県立博物館・美術館と連携・協力し、それぞれの地区で、博物館関係者の資質向上とネットワーク構築のための異なる内容の研修を開発し、試行的に実施した。

平成28年度 実施体制イメージ



博物館の連携協働による科学リテラシーの向上の概念図



概要
地域博物館との連携企画展及びその巡回による地域活性化の実践
「国立科学博物館・巡回ミュージアム in 岩手」の実施

岩手県立博物館において県内を巡回する想定で企画展を実施。岩手県立博物館の展示規模と同程度の展示を巡回するのは困難であるため、その中から核となる要素を抜き出し、巡回仕様へと仕立て上げた。岩手県立博物館での展示自体は、「国立科学博物館・コラボミュージアム in 盛岡」として先行して実施し、その後の各地区への巡回事業を「国立科学博物館・巡回ミュージアム in 岩手」として展開した。岩手県立博物館との連携ということで、岩手県民に対して、改めて岩手について知ってもらおうという内容とした。岩手県岩泉町では、生物種の9割以上が絶滅したといわれている約2.5億年前の大量絶滅を示す貴重な地層が近年発見されており、今回の連携企画展はその「古生代の大量絶滅」をテーマとした。この展示を県内で巡回することで、貴重な財産(=レガシー)が存在することを発信し、世界的にも貴重な場所が県内にあることを改めて知ってもらい、そういった財産の再発見を促すことで関心を高める契機となることを目指した。さらに、各会場においてそれぞれの館の有する標本の中から展示内容に合致するものについて付加することにより、巡回先の会場の有する資料の活用を図った。



各会場での実施報告

会 場	会 期	入場者数
岩手県立博物館	平成 28 年 6 月 7 日(火)～8 月 21 日(日) (76 日間)	10,077 名 (前年度比 115%)
岩泉町民会館	平成 28 年 8 月 27 日(土)～9 月 11 日(日) ※台風 10 号により閉鎖日あり	208 名
大船渡市立博物館	平成 28 年 9 月 16 日(金)～12 月 4 日(日) (74 日間)	2,361 名 (前年度比 117%)
久慈琥珀博物館	平成 28 年 12 月 9 日(金)～平成 29 年 2 月 26 日(日) (78 日間)	1,772 名 (前年度比 101%)

① 岩手県立博物館

生命史上最大といわれる古生代ペルム紀末に生じた大量絶滅事件を中心に、古生代の各時代に絶滅した生物とその後繁栄した生物について、400 点を超える標本を用いてその背景を交えて紹介する展示会を開催した。また、現在絶滅の危機に瀕している生物たちもあわせて紹介し、現在の身のまわりの環境について考える機会を提供した。また、イベントとして岩手県内の大量絶滅地層の研究者による特別講演会や展示解説会を実施したほか、「教員のための博物館の日」を北東北地方で初めて開催した。



実施イベント

- 講演会「岩泉に眠る古生代 - 中生代の境界地層」
日時：平成 28 年 7 月 10 日(日) 参加者：86 名
- 展示解説
日時：平成 28 年 6 月 11 日(土)、7 月 31 日(日)、8 月 7 日(日) (子ども向け展示解説)
平成 28 年 8 月 1 日(月・臨時開館日)、8 月 11 日(木・祝)
参加者：計 79 名
- ミニ「教員のための博物館の日」(展示案内、バックヤードツアー、意見交換)
日時：平成 28 年 8 月 10 日(水) 参加者：3 名
- 「教員のための博物館の日」
日時：平成 28 年 12 月 25 日(日) 参加者：25 名



② 岩泉町民会館

岩泉町においては、日本で初めて発見された恐竜化石である、「モシリユウ」の展示を付け加えた。残念なことに会期中に岩泉町は、台風 10 号による自然災害を受けてしまい、会場である岩泉町民会館は被災者の避難所となった。結果として会期中に展示を開くことができたのは 15 日間のうち 5 日間であった。そのため予定していたイベントはすべて実施することができなかった。

実施イベント

- (台風被災により、すべて中止)
- 地質観察会
日時：平成 28 年 9 月 4 日(日)
- 講演会「岩泉の地層から読み解く地球の歴史」(高校生対象イベント)
日時：平成 28 年 9 月 5 日(月)
- 展示解説&化石のレプリカ作り
日時：平成 28 年 9 月 11 日(日)



③ 大船渡市立博物館

大船渡市立博物館では、展示に2片の四放サンゴ化石を追加した。これは、同一採集者による同一個体の標本であったものが2つに割れたもので、大船渡市立博物館と陸前高田市立博物館がそれぞれ別々に保管していたものであるが、今回の展示にあわせ「再会」とタイトルを付し特別に展示した。また気仙地区理科教育研究会研修会を実施し「教員のための博物館の日」の内容説明、巡回ミュージアムの展示解説等を行った。また一般向けイベントとして国立科学博物館サイエンスコミュニケーター養成実践講座(SC 講座) 修了生等による「恐竜 3D めりえ」(めりえをした恐竜イラストを Web カメラで読み込むとパソコン上で立体化され、それを自由に動かしたり、一緒に記念撮影したりできるイベント) を実施した。

実施イベント

- 気仙地区理科教育研究会研修会
日時：平成 28 年 11 月 8 日(火) 参加者：7 名
- 恐竜 3D めりえ
日時：平成 28 年 11 月 20 日(日) 参加者：103 名



④ 久慈琥珀博物館

久慈琥珀博物館では、久慈で発見された恐竜及び翼竜化石を恐竜展示コーナーに追加展示した。また期間中にはイベントとして、岩手県立博物館の望月貴史学芸員による「大量絶滅に関するお話及び展示解説」や国立科学博物館 SC 講座修了生等による「恐竜 3D めりえ」を実施した。また、三陸ジオパーク推進協議会と共催で「化石のレプリカ作り研修」を実施し、博物館職員や三陸ジオパーク推進協議会職員等に対して、化石のレプリカ作りの技術研修、巡回ミュージアムの展示を活用した県内の地域資源について解説や参加施設相互の情報交換等を行った。

実施イベント

- 大量絶滅に関するお話及び展示解説
日時：平成 28 年 12 月 10 日(土) 参加者：19 名
- 化石のレプリカ作り研修及びイベント実施
日時：平成 29 年 1 月 13 日(金) (博物館等の職員向け研修) 参加者：16 名
平成 29 年 1 月 14 日(土) (一般向けイベント) 参加者：28 名
- 恐竜 3D めりえ
日時：平成 29 年 2 月 12 日(日) 参加者：17 名



地域博物館での研修事業の開発と試行的展開

概要

地域博物館が持続的に活動していくためには、その博物館で活動する博物館関係者の資質向上やネットワークの活性化など、博物館で活動する関係者を元気にすることが不可欠である。博物館関係者の資質向上のための手段としては博物館研修などが挙げられるが、地理的な要因や館の規模などから、首都圏で開催の研修等にはなかなか参加する機会が少ない関係者も多い。こうした背景を受けて、地域の博物館学芸員やボランティア等、地域資源を活用したプログラムに携わる人材に対する研修を開発し、地域の博物館を会場に試行的に実施した。

研修1.「アルバム辞典をつくろう！―博物館関係者向け研修―」

研修としてのねらい

博物館関係者が普段からよく見ている展示室を、「言葉」と「写真」という新しい切り口で見つめることによって、展示の多様な見方の再発見・共有を図る。JSPS 科学研究費補助金（研究代表者：国立科学博物館 小川義和：JP24220013）の研究成果の一つである、一般向けイベント「アルバムディクショナリー」をベースに開発を行った。博物館の展示そのものに着眼し、他者とその見方を共有するといった要素が、学芸員が日頃見慣れた展示を改めて見直す契機になるのではと考え、学芸員向けの研修にアレンジしたものである。

- 普段と異なる視点で展示を見直すことで、博物館の魅力を再発見
- 展示物の解釈の多様性の共有
- 研修を通じた博物館関係者同士のコミュニケーションの促進

実施要項

- 会 場：帯広百年記念館
 - 実施日：平成 29 年1月 24 日（火）
 - 対象者：十勝地区博物館学芸員・ボランティア
 - 講 師：国立科学博物館 小川義和、庄中雅子
 - 参加者：16 名
- ※十勝管内博物館学芸職員等協議会の研修会、帯広百年記念館のボランティア研修会として実施

参加者の声（一部抜粋）

Q. 研修のご意見・ご感想について

- 同じ館の職員であっても展示に対する思いが異なることを知り、それを共有することで、資料を違う角度からとらえることができた。
- 各グループの作品を発表の際に、その展示を所掌している学芸員からコメントをもらうことで、より深みのある情報共有となった。
- 展示について、ボランティアとじっくり話す機会が今までなかったことに気付いた。
- カメラと単語を切り口に展示をみるというのは、研修だけでなく、自分たちの事業としても活用できそうにおもう。特に常設展示を活かすのに有効なのではないか。試行的にいろいろやってみたい。
- 常設展示に着目した事業というのは、なかなか展開できていない。多方面に活用していく方策として取り入れてみたい。



研修2.「サイエンスコミュニケーション入門講座」

研修としてのねらい

ある機関や団体でさまざまなサイエンスコミュニケーション活動（科学や技術をテーマとして行う対話や体験活動を主にするもの）を行っている場合に、この活動全体を点検することが大切となる。それは、こうした活動が当初立てた目的どおりに行えているか、団体の活動理念と合っているかをチェックし、より効果的なサイエンスコミュニケーション活動を実施するためである。

この研修会では、ある地域のさまざまな博物館職員が集い、それぞれの館で実施しているプログラムを持ち寄って紹介しあうこと、そのあとで、個々のプログラムを共通の枠組み（目的や期間など）のなかに位置づけて、それぞれのプログラムの特徴について点検を行った。

- サイエンスコミュニケーションとは何かを学ぶ
- 自館の学習プログラムのねらいと対象を明確にする
- 自館の使命と学習プログラムのねらいとの整合性を確認する
- 他館との比較を通じて、自館の学習プログラム作成のヒントを得る
- 研修を通じて博物館関係者同士のコミュニケーションが促進する

実施要項

- 会 場：沖縄県立博物館・美術館
- 実施日：平成 29 年2月1日（水）
- 対象者：沖縄県内の博物館関係者
- 講 師：国立科学博物館 小川義和、神島智美、小川達也
- 参加者：17 名

プログラムの内容

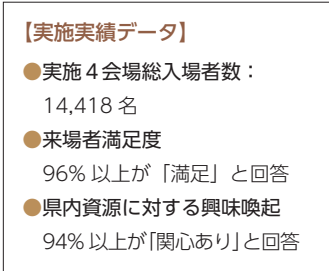
- 【講義1】博物館におけるサイエンスコミュニケーションとは
科学リテラシーの涵養とその手段としてのサイエンスコミュニケーションについて
- 【講義2】学習支援事業を分類する
博物館等施設において学習プログラムを企画する上での目的や手法を明確化することの重要性について
- 【グループワーク】
各施設の事業の把握、事業の分類軸の検討
参加者の館で行っている活動について紹介し、その各活動について軸を定めて分類する手法についてグループで検討
- 【発表】各グループからの発表
グループワークで整理した分類軸等について、それぞれのグループによる発表と共有



事業 1 巡回ミュージアム in 岩手

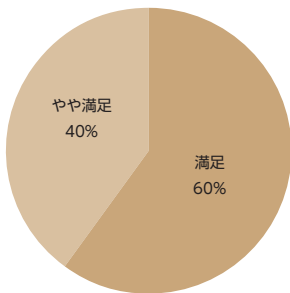
今回の巡回事業では、各会場に岩手県近郊の白地図を用意し、来場者がどこから来たかシールで示してもらい調査を実施した。岩手県立博物館（盛岡市）での実施では内陸部を中心に来場者が集まっていること、その他の各会場では周辺地域はもちろん、県をまたいだ周辺地域からの来場もあることなどが確認できた。また、高速道路沿いのアクセスがよい場所であれば、多少の遠方であっても来場する傾向も見られた。全ての会場の結果を重ねたところ、巡回することで特に沿岸地域の人々に博物館事業を届けることが出来たことが分かった。この手法は、事業がどの程度の範囲に波及効果があったかを図る一つの手法として有効であると考えられる。また、会期中実施のアンケートでの定性評価より、県内の貴重な資料を活用した展示やプログラムを通じて、県民に県の有する財産に改めて関心を持ってもらうという目的は達成できた。同時に本事業を通じて、今回参画した博物館関係者が、他館や学校等の博物館以外との連携を深めることができたかということについても、関係者に対するアンケート等から明らかになった。

一方で、今回の事業はいわばキックオフにあたるモデル開発的な取組であり、今後の岩手県内の博物館等施設の持続的な連携につながってこそ、今回の事業成果といえるだろう。実際に、「教員のための博物館の日」については、県博での継続実施や大船渡市立博物館での新規実施が予定されるなど、今回の事業の成果が事業終了後にも継承され、活かされている。

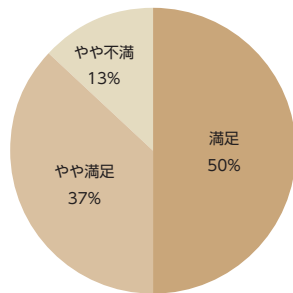


事業 2 地域博物館での研修事業の開発と試行的展開

北海道と沖縄という、地理的な条件からなかなか研修参加の機会が少ない地域において、博物館関係者向けの事業を実施したところ、参加者からの満足度は高く、こういった研修の需要を確認できた。またワークショップ式の本研修が、学芸員やボランティアなど、博物館関係者同士のコミュニケーションを触発する場としても有効であるということも確認でき、新たな学芸員研修プログラムの開発と実施を通じてモデルプログラムを確立できた。



アルバム辞典研修の満足度



サイエンスコミュニケーション研修の満足度

今後の課題

岩手県内の博物館とのモデル的な連携実施については、事業評価者から一定の評価を得たが、一方で、各地域によって博物館同士や地元とのつながりの状況が異なるとの指摘もあった。岩手県についての今後のフォローアップもさることながら、平成 28 年度事業以降の他地域での展開にあたっては、各館の置かれている状況を踏まえながらの展開を行っていくことが必要と考えられる。

研修事業においては、各地域の博物館に国立科学博物館の持つノウハウを提供できただけでなく、国立科学博物館にとっても新たに開発した対話型の研修プログラムを実施し、この実績を蓄積することができた。今後も実施件数を増やして、さらにブラッシュアップしていくことが必要である。

そして、平成 28 年度の事業成果の一部は、全国科学博物館協議会において博物館関係者に対し発表したところであるが、その他の成果を含め、今後も発信と実施を他地域にも広げていく必要がある。

学芸員等の資質向上とネットワークの構築を通じた博物館の機能強化モデルの提言

事業概要・目的

平成29年度は地域の中核博物館と国立科学博物館が連携し、巡回展示を行うだけでなく、同一地域内でのネットワーク構築と、地理的に離れた2館の情報共有と発信の2本柱で構成し、地域内での連携強化はもとより、国内の自然科学系博物館の連携強化と地域振興に寄与するためのモデルについて考察した。具体的な取組として以下の2つの枠組みで実施した。

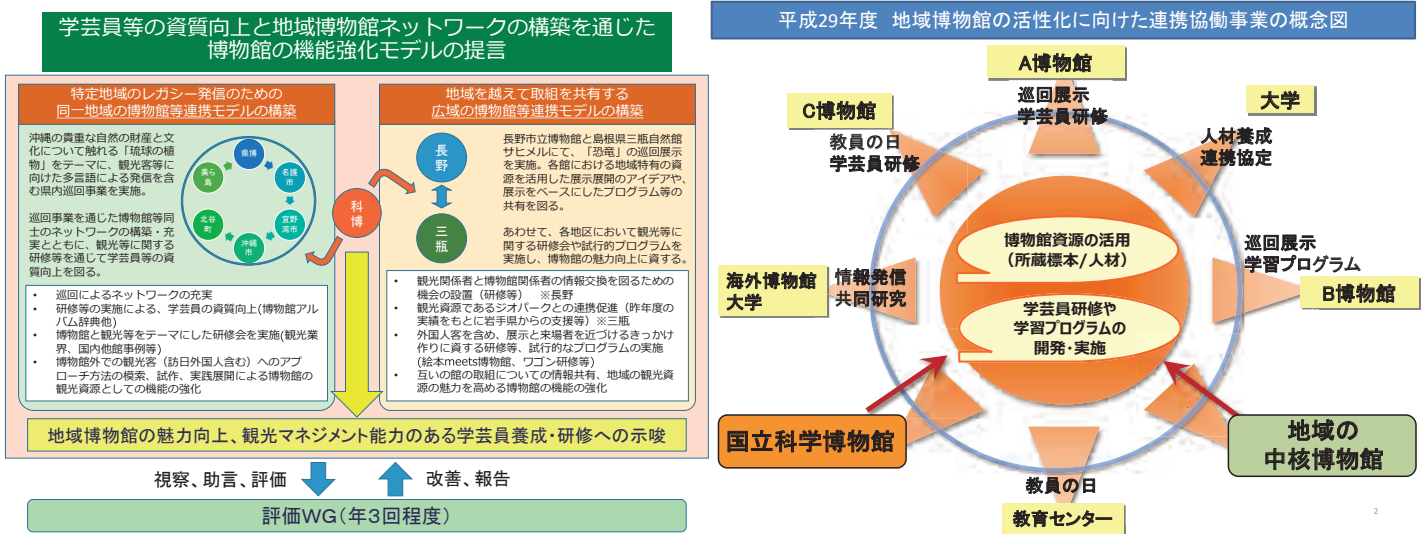
事業1 同一地域の博物館等連携モデルの構築 —巡回ミュージアム in 沖縄—

同一地域内連携のモデルケースとして、沖縄県内の各博物館等施設と連携した。国立科学博物館で行ってきた「琉球の植物」に関する研究の成果を基に、県内博物館が所有する植物由来の民具等の人文系資料との融合を意識し、地域特有の自然とそれにより醸成された地域文化を関連づけた情報発信をした。展示以外では研修事業として、博物館の魅力を学芸員等が再認識するための研修と、標本作成に関する研修を実施した。

また、外国人を含む観光客の多い沖縄で、博物館の魅力をいかに発信していくかを考えるため、ホテルを会場にした博物館外でのアウトリーチ展示の試行的展開や、観光業界関係者と博物館関係者を交えた勉強会を実施した。

事業2 広域の博物館等連携モデルの構築 —巡回ミュージアム in 長野・in サヒメル—

広域の博物館連携のモデルケースとして、長野市立博物館および島根県立三瓶自然館と連携し、「恐竜」をテーマとした展示を実施した。それぞれの展示を実施するにあたり、報道機関と密に連携を取ることで、地元への発信を意識した。また、学芸員および博物館ボランティアを対象とした研修プログラムや、観光振興について議論するシンポジウムを実施した。また、これらの事業において、長野市立博物館と島根県立三瓶自然館の学芸員や職員が相互に交流する機会を設けることで、広域の博物館同士が各館の現状について情報共有し、今後の魅力向上に向けて連携するための基盤を作成した。



巡回ミュージアム in 沖縄「琉球の植物」

概要 同一地域の博物館等連携モデルの構築 「国立科学博物館・巡回ミュージアム in 沖縄」の実施

同一地域内連携のモデルケースとして、沖縄県内の各博物館等施設と連携し、国立科学博物館で行ってきた「琉球の植物」に関する研究の成果を元に、県内博物館が所有する植物由来の民具等の人文系資料との融合を意識した内容とし、地域特有の自然とそれにより醸成された地域文化を関連づけて情報発信をした。これにより、地域の所有する資源・資料を再発見し、地元の持つ魅力を改めて一般へ広く波及させることを狙いとした。また、展示の実施だけでなく、博物館職員等を対象にした研修を実施した。地域博物館では研修や新しいプログラムに接する機会が少ないため、研修の機会を設けることで、県内博物館等の魅力向上に資することを目指した。

さらに、観光客にいかにして博物館自体の魅力を発信していくかが、観光客の多い沖縄県の持つ課題のひとつであり、その対応として、観光客の滞留する施設であるリゾートホテルにおいてアウトリーチ展示を実施した。地域の自然と文化の紹介を多言語で行うことで、外国人を含む観光客に沖縄の自然を知ってもらうと同時に、博物館自体の情報発信することを目的とした。またこれらの取組を踏まえて、博物館職員およびホテル関係者、沖縄美ら島財団の広報担当職員等との勉強会を行い、他業種と意見を交わす機会を設けた。



各会場での実施報告

会 場	会 期	入場者数
海洋博公園熱帯ドリームセンター	「琉球の植物展・国立科学博物館巡回ミュージアム in 海洋博」 平成29年7月22日(土)～8月27日(日)	13,257 名
沖縄県立博物館・美術館	「琉球の植物」※ 沖縄県立博物館特別展「ウィルソンが見た沖縄」と同時開催 平成29年9月8日(金)～10月15日(日)	8,856 名
名護博物館	「琉球の植物～身近な植物とくらし～」※台風による閉鎖日あり 平成29年10月27日(金)～11月19日(日)	863 名
宜野湾市立博物館	「琉球の植物展」 平成29年11月25日(土)～12月17日(日)	832 名
沖縄市立郷土博物館	「琉球の植物 沖縄市の植物」 平成30年1月12日(金)～2月10日(土)	998 名
ちたんニライセンター	「琉球の植物～南北はざまの地北谷～」 平成30年2月19日(月)～3月2日(金)	629 名
ロワジュールホテル那覇	ゆくゆんミュージアム(博物館外アウトリーチ展示) 平成30年2月9日(金)、10日(土)	35 名
ヒルトン沖縄 北谷リゾート	ゆくゆんミュージアム(博物館外アウトリーチ展示) 平成30年2月24日(土)、25日(日)	167 名

実施イベント

海洋博公園熱帯ドリームセンター

- 講演会：「琉球の植物～ホットな研究者の世界～」
平成 29 年 8 月 26 日(土) 一般財団法人美ら島財団本部棟
講 師：國府方 吾郎(国立科学博物館)
中村 剛(北海道大学北方生物圏フィールド科学センター)
傳田 哲郎(琉球大学理学部海洋自然科学科)
参加者：62 名
- 研修会：博物館等関係者向け展示解説・博物館等利用に関する意見交換会
平成 29 年 8 月 26 日(土) 参加者：13 名



沖縄県立博物館・美術館

- イベント：「身近な植物で押し花をつくろう!」
平成 29 年 9 月 16 日(土)、9 月 30 日(土)
参加者：35 名

宜野湾市立博物館

- 展示解説：博物館友の会展示解説会
平成 29 年 11 月 25 日(土) 参加者：15 名
- 講演会：「琉球の植物」
平成 29 年 12 月 3 日(日)
講師：國府方 吾郎(国立科学博物館)
参加者：34 名

ちたんニライセンター

- 勉強会：「博物館における観光・多言語対応に関する勉強会」
平成 30 年 2 月 26 日(月)
参加者：学芸員、広報担当、ホテル関係者 12 名

※その他、観察会も実施

名護博物館

- イベント：「草木おもちゃづくり」
平成 29 年 11 月 11 日(土) 参加者：20 名
- 講演会：「琉球の植物～島人ぬ宝～」
平成 29 年 11 月 18 日(土) 東江地区会館
講師：國府方 吾郎(国立科学博物館)
参加者：21 名
- イベント：「パーキづくり」
平成 29 年 11 月 19 日(日) 参加者：12 名

沖縄市立郷土博物館

- 野外観察会：身近な草と世界地図
平成 30 年 1 月 20 日(土) 参加者：6 名
- 野外観察会：土と植物の秘密
平成 30 年 1 月 27 日(土) 参加者：1 名



研修の実施

学芸員の資質向上というテーマのもと、各地域博物館で研修を実施した。あらかじめ記されたキーワードに合致する写真を館内で撮影することで、普段とは異なる切り口で展示資料を見つめ直すことを狙いとしたアルバムディクショナリー研修や、樹脂封入標本の製作と標本データベースの活用に関する講習を組み合わせ、標本の取り扱いに関する研修、さらに博物館ボランティアを対象として「かはくのモノ語りワゴン」研修などを実施した。これらの研修は、学芸員の知識や技術を直接的に向上させる研修であり、博物館等施設の持続的な発展には不可欠と考えられる。

研修1.「アルバム辞典をつくろう！―博物館関係者向け研修―」

- 会 場：沖縄県立博物館・美術館
- 実施日：平成 29 年 6 月 19 日(月)
- 講 師：北村美香・原田雅子(結 creation)
- 参加者：14 名



研修2.「自然史標本の継承・発信実践研修―樹脂封入標本製作を中心に―」

- 会 場：沖縄県立博物館・美術館
- 実施日：平成 30 年 2 月 1 日(木)
- 講 師：三橋 弘宗(兵庫県立人と自然の博物館) 細矢 剛(国立科学博物館)
- 参加者：18 名



研修3.「『かはくのモノ語りワゴン』研修」

- (長野県)
- 会 場：長野市立博物館分館 信州新町化石博物館
- 実施日：平成 29 年 6 月 24 日(土)、25 日(日)
- 講 師：国立科学博物館職員、長野市立博物館職員
- 参加者：24 名
- (島根県)
- 会 場：島根県立三瓶自然館
- 実施日：平成 29 年 10 月 13 日(金)
11 月 26 日(日)
- 講 師：国立科学博物館職員
かはくボランティア
島根県立三瓶自然館職員
- 参加者：7 名



概要

広域の博物館等連携モデルの構築

「国立科学博物館・巡回ミュージアム in 長野・in サヒメル」の実施

広域の博物館等連携のモデルケースとして、長野市立博物館と島根県立三瓶自然館サヒメルと連携し、「恐竜」という特定のテーマについて各館で展示を行った。各館が持つ地域特有の資源（標本資料等の資源、人的ネットワーク等）を活用して付加価値をつけ、地域の特性をアピールし集客に結びつけるというノウハウや、来館者へのアプローチ方法などについて情報共有を図ることで、各博物館の今後の魅力向上に向けた連携へとつなげることを目指した。

長野では、国立科学博物館の資料に近隣施設等の所蔵資料を組み合わせることで、地域の貴重な資料の重要性を伝えるとともに、過去から現在までの絶滅と生き物の移り変わりを紹介する展示を実施した。一方、島根では、恐竜全身骨格の展示を基本としながら、最新の研究成果を紹介する展示を実施した。それぞれの展示を実施するにあたり、報道機関と密に連携を取ることで、地元への発信を意識した。

また、展示以外の事業として、学芸員および博物館ボランティアを対象に、これまでに国立科学博物館で実施してきたプログラム研修や観光というテーマに対して博物館が果たす役割について議論するシンポジウムを実施した。これらの研修においては、長野市立博物館と島根県立三瓶自然館の学芸員や職員が交流する機会を設けることで、広域の博物館同士が各館の現状について情報共有し、今後の更なる魅力向上に向けて連携する基盤作りを狙った。特に、観光にかかるシンポジウムを長野市で実施するにあたっては、福井県立恐竜博物館の事例報告とともに、島根県立三瓶自然館からの事例報告を盛り込むことで、背景の異なる2館が情報を共有することができるようにした。

各会場での実施報告

① 国立科学博物館・巡回ミュージアムin 長野「恐竜たちがやってくる」

絶滅と生き物の移り変わりをメインテーマに、国立科学博物館および長野市立博物館、近隣博物館、学校等の所蔵資料を展示した。展示会以外の事業として、国立科学博物館で実施する展示プログラムに関する研修や、情報発信拠点としての博物館が果たす役割について議論するシンポジウムを実施した。

会場	会期	入場者数
長野市立博物館	平成29年7月15日(土)～9月3日(日)(45日間)	18,353名 (前年度比216%)

実施イベント

- 講演会：「最新恐竜学」
平成29年7月30日(日) 参加者：129名
講師：真鍋 真(国立科学博物館)
- イベント：「化石消しゴムを作ろう」
平成29年7月17日(月)、8月13日(日) 参加者：315名
- イベント：「翼竜グライダーをつくろう」
平成29年8月11日(金) 参加者：104名
- 体験教室：「恐竜3Dぬりえ」
平成29年8月20日(日) 参加者：128名
指導：国立科学博物館職員等
- シンポジウム：「地域の情報発信拠点としての博物館」



② 国立科学博物館巡回ミュージアムinサヒメル 「かはくから恐竜がやってきた!」

目玉となる2体の大型恐竜の全身骨格に加え、最新の恐竜研究の成果を紹介する内容とした。展示会以外の事業として一般向けイベントのほか、博物館関係者の資質向上を狙いとした研修事業を実施した。研修を通じて、島根県内の博物館等施設間のネットワーク作りに貢献した。

会場	会期	入場者数
島根県立三瓶自然館	平成29年10月7日(土)～11月26日(日)(44日間)	19,459名 (前年度比130%)

実施イベント

- イベント：「恐竜3Dぬりえ」
平成29年10月8日(日)、10月29日(日)、11月19日(日)
参加者：166名
- イベント：「化石のレプリカ作り」
平成29年10月14日(土)、10月15日(日) 参加者：64名
- 講演会：「きょうりゅうはかせの『最新!恐竜学』」
平成29年10月21日(土) 島根県立三瓶自然館 ビジュアルドーム
講師：真鍋 真(国立科学博物館) 参加者：125名
- イベント：「えほん meets 博物館」
平成29年10月22日(日) 島根県立三瓶自然館 こども博物館他
講師：真鍋 真(国立科学博物館) 参加者：17名
- 体験教室：さんべ絵本フェスタ「絵本で学ばせ!めいのれきし」 参加者：131名
- 研修会：「世界から見た高見の地質と貝化石」
平成29年11月18日(土) 高海自治会館
講師：遠藤 大介(島根県立三瓶自然館)、芳賀 拓真(国立科学博物館)
参加者：12名



シンポジウム「地域の情報発信拠点としての博物館」の開催

国内有数の観光地である各都道府県においては、いかにして観光客に地域文化への興味・関心を惹起させ、博物館への来訪へつなげるかは大きな課題の1つである。そこで、観光に対する博物館の在り方について議論するシンポジウムを長野にて開催した。博物館関係者に加え、行政関係者および観光業界関係者にも広報を行い、複数業種の参加者による多角的な視点からの議論が行われることを狙った。このシンポジウムでは、地域事例の紹介のために島根県立三瓶自然館の代表者が講演とともに意見交換を行った。また、地理的に離れた2館が情報共有できる機会を通じて、長野市立博物館と長野市観光振興課との連携が以前よりも強化されたことが成果として挙げられる。さらに長野市の情報発信のためのリーフレットの作成を新たに両者が協働で行うという成果も現れており、単回の事業実施にとどまらない継続的な活動が期待できる結果となった。

- 実施日：平成29年12月15日(金)
- 会場：JA 長野
- 講師及びパネリスト： 山口 辰幸(福井県立恐竜博物館)
龍 善暢(島根県立三瓶自然館)
田辺 智隆(長野市立博物館)
村井 善晃(長野市商工観光部)
- 参加者：博物館・行政・観光業界関係者等 45名



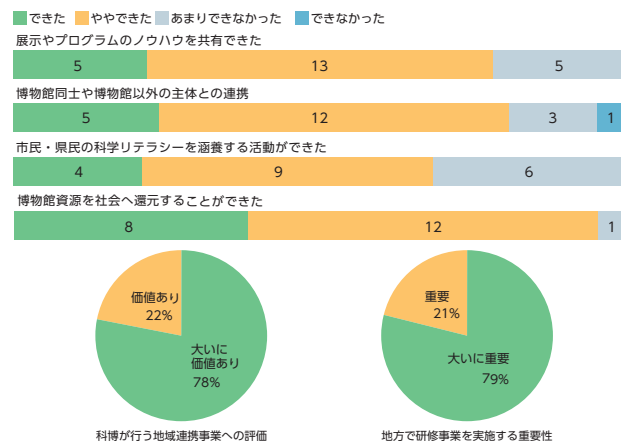
2つの連携モデルの双方での展示、博物館関係者向け研修、観光に対する対応や多言語にかかる取組の実施から3つの観点での成果がみられた。

展示制作における連携モデルの構築

共同展示の実施を通じて、各地域博物館の資源や地域の財産について改めて関心を持ってもらう契機を作ることができたと考えられる。沖縄での実施では連携施設同士での資料の貸借や生植物展示の協力などがなされたことで、独自の資料の追加や各館ごとの展示工夫がみられた。このような展示の制作方法は、資料に共通点を持つ特定地域の複数館と連携しながら展示制作をする際のモデルとなることが示唆された。また、長野で実施したシンポジウムの中では、島根県が事例報告を行い、背景の異なる館同士が情報共有を図ることで新たに得られる知見もあった。

研修事業の形態

本事業で実施した研修プログラムや勉強会および一般向けの学習プログラムは、参加者及び事業実施側を対象としたアンケートから、博物館の学習機能強化に効果があることが分かった。特に長野では、研修を受けたボランティアが展開中の共同展示において研修の内容を実演し、その成果を活かすなど、当館の研究の成果を活かした展示と研修を重層的に組み合わせて展開することで、より効果的な事業を展開できることを示すことができた。



観光資源としての博物館の魅力発信

観光や多言語対応については、長野市におけるシンポジウム、沖縄のホテルでのアウトリーチ展示および、ホテル関係者も含めた観光・多言語対応に関する勉強会を行った。長野においては、観光に関するシンポジウムを行政と連携して実施した結果、博物館と行政の間の連携が強化され、来年度に向けた博物館紹介資料を協働で作成するという成果が生まれた。沖縄では、展示や勉強会を実施することにより、ホテル業界といった異業種との意見交換を行う端緒となり他業種との連携や、広域での連携といった広がる取組が、今後の博物館の機能強化のために有効であるということがわかった。

今後の課題

同一地域の博物館等連携においては、国立科学博物館がベースとなる展示を作成し、参画館が特徴的な展示物を加えるという新たな連携の在り方が構築できたが、「各館の個性を参画館と情報共有した上で、巡回展示の意義・広報戦略・誘客対策を入念に練る時間をもっと設けるべきであった。」という意見もあり、今回のモデルを基本としつつ、より精練していくことの必要性が見えた。また、地方における博物館関係者向けの研修や事例共有を行う機会の強化の必要性という点では、地方では研修受講の要望が多いものの、開催場所や予算、時間の都合上など、研修への参加が難しいという現状が見えてきた。地域の中核となる博物館や博物館協会等と連携した研修事業を実施することで、研修を受講できない博物館等関係者にも研修の機会を提供できると望ましい。そして、観光資源としての博物館の魅力発信の点からは、沖縄のホテルでのアウトリーチ展示は、博物館に足を運ばない観光客への発信としては一定の成果があったが、展開する空間との調和や客層の意識など、実施にあたって留意すべき部分が浮かび上がってきた。長野では、シンポジウムを契機に博物館と観光振興課の交流が進んだことが成果として挙げられ、引き続き博物館の魅力発信のために連携を続けることが期待される。観光業界や行政を一例に、博物館が異業種と連携することで、更なる博物館の魅力発信へつなげると考えられ、地域の持つ観光資源を学芸員がいかに価値づけていくか、また博物館をどのように関連づけていくかが、博物館がまず取り組めるアプローチであると考えられる。さらには観光との関連事業の実施にあたっては事業の対象とする利用者（客層）についても考慮しつつ企画していく必要があると考えられる。

「出会いと学び」を通じた学芸員資質向上と博物館機能強化モデルの展開

事業概要・目的

平成30年度は、北海道博物館協会、北海道博物館および国立科学博物館が連携して、地域博物館及び博物館職員の活動の活性化に資するべく巡回事業を通じた参画館のネットワーク構築を引き続き行う中で、地域での継続的な研修事業の実施を可能とするモデルの構築、および、博物館以外の機関との積極的な交流による連携基盤作りと情報共有を目的に、博物館関係者との出会いと学びによる「技術の深化」および他業種との出会いと学びによる「新たな協力体制の模索」という2つのテーマを意識しながら事業を展開した。これらの事業を通じて、長期的・短期的な視点から博物館自体の魅力向上を行うとともに、その博物館の魅力について、観光客を含めた外部へ発信するための具体的な方策について、博物館外の主体も含めて議論できる環境構築をモデル的に実施することで、次年度以降の各地区での研修のニーズの喚起や実施に資することをねらった。

博物館関係者同士の出会いと学びー研修を通じた「技術の深化」ー

博物館等の継続的な魅力向上のためには、学芸員や職員、ボランティア等の博物館関係者の資質向上が不可欠である。特に地域博物館の学芸員においては求められる能力が多岐に渡り、研修や勉強会への参加により積極的に個人の能力を高めることが期待される。しかし、研修開催場所や予算の問題などの理由から研修への参加機会が限られている状況である。そこで今回は北海道を対象に、道内6エリアを巡回しながら複数の研修事業を展開し、学芸員等の資質向上の機会を設けた。研修内容の決定にあたっては、北海道博物館協会を通じて、学芸員側のニーズや受講の障壁などについて事前調査を行うことで、研修をより効果的にした。また、研修内容の一部を録画、編集して映像化するなど、研修内容を広く共有するコンテンツを試行的に製作した。

他業種との出会いと学びー博物館以外との交流による「新たな協力体制の模索」ー

観光や多言語への対応という現代的な課題は、博物館単館あるいは博物館業界の経験や取組だけでの解決は難しく、解決のためには、専門の知識を有する外部からの意見を積極的に吸収することや、博物館以外も含めた複数機関が連携して取り組むことが不可欠である。前年度の事業を踏まえ平成30年度は観光行政等と連携し、勉強会やシンポジウムなどの情報交換を行い、外国人を含めた観光客への発信のための取組事例や、利用者の満足度向上、快適な空間作りのためのノウハウ等を、博物館関係者が他業種から学ぶ機会を設けた。一方、博物館側からも博物館の魅力や現状、地域の自然的価値や文化的価値を観光業界等に伝え、博物館外から間接的に博物館の魅力発信してもらう契機となり、双方向性のネットワークの構築という新たな連携の在り方を作ることを目的とした。



概要、テーマ、ねらい

- 趣旨
北海道日高・胆振地区の加盟館園職員・関係者が一堂に会し、参加者の資質向上と博物館活動の一層の活性化を図る。
- 研修テーマ
「博物館の展示の魅力を伝えよう」
国立科学博物館及び北海道博物館協会と共催し、「写真」と「ことば」で博物館の展示の魅力を伝えるワークショップ型研修を実施した。
- 会 場：豊浦町旧礼文華中学校（収蔵庫）
- 講 師：北村 美香（結 creation）
- 参加者：加盟館園職員・関係者及び本研修会の趣旨に賛同する方 24 名

スケジュール

10 月 16 日	
13:30 ～ 13:40	開会式
13:40 ～ 17:30	研修 「博物館の展示の魅力を伝えよう」 （講演、実習、全体協議）
10 月 17 日	
9:00	集合
9:15 ～ 12:00	エクスカージョン （国指定名勝「ピリカノカ」 カムイチャシ 他）

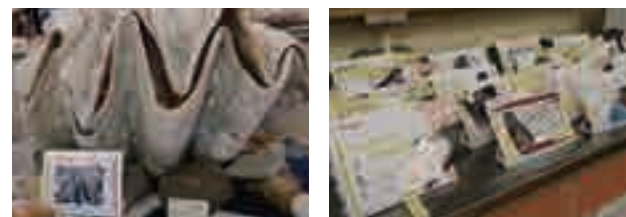


参加者の声（一部抜粋）

Q. 今回の研修のご意見・ご感想について

早速、中学校2年生の職場体験で活用させていただきました。初日は展示物紹介。2日目が、町紹介、2時間歩き、写真を撮り、マップを作りました。途中途中で、キーワードを思い出す（確認する）ことが大切でした。あと、ちょっとしたアドバイス。実習生の行動を見ながら、カメラを向けた対象物の簡単な説明、例えば、リサイクル業者は住民にとって不可欠なんだよ～とか。認識していない対象物（例えば石碑等）の説明とか。博物館資料館事業だけでなく、地域づくりにも使える手法と感じています。

「展示発見カード」は自館においてこども向けのイベントでも活用できそうだと思います。



研修実施後、作成したカードを一冊のアルバムにまとめました。



概要、テーマ、ねらい

道北地区・網走地区の博物館関係者を主な対象として、樹脂封入標本の実践的な製作工程を体験するとともに、自然史標本の収集、保管、活用に関する座学や事例紹介、意見交換を行う。それらを通じて、地域の自然を残し、伝えることについて、改めて考える機会を設け、博物館関係者のスキルアップをねらう。本研修は、2か所の会場で実施した。

1日目	①士別市立博物館（道北地区） 「樹脂封入標本を作ってみよう ～地域の自然を残す工夫、伝える工夫～」
2日目	②美幌博物館（網走地区） 「樹脂を使った標本作成ワークショップ」

（道北地区）

- 会 場：士別市立博物館
- 講 師：三橋 弘宗（兵庫県立人と自然の博物館）
- 参加者：道北地区および道内の博物館関係者 16 名

（網走地区）

- 会 場：美幌博物館
- 講 師：三橋 弘宗（兵庫県立人と自然の博物館）
- 参加者：近隣博物館学芸員、自然解説スタッフ、学芸員課程を学ぶ学生、博物館ボランティア等、参加者数 17 名



スケジュール

10 月 27 日（道北地区）	
9:50 ～ 10:00	一層目樹脂の調整（参加者も交えて）
10:00 ～ 10:15	イントロダクション
10:15 ～ 11:00	一層目樹脂投入、サンプル選び
11:00 ～ 11:30	サンプル設置、2 層目樹脂投入
11:30 ～ 12:00	骨格標本展の展示標本を題材にした標本作製解説
12:00 ～ 13:20	昼食 ※ホームセンターで役立つ道具紹介（希望者のみ）
13:20 ～ 14:00	3 層目投入
14:00 ～ 15:15	研磨作業 （卓上丸ノコによる切断と耐水ペーパーの研磨）
15:15 ～ 16:40	スライドによる活用事例紹介・質問タイム
16:40 ～ 17:00	記念写真撮影

10 月 28 日（網走地区）	
11:00 ～ 12:00	樹脂 1 層目流し込み
12:00 ～ 13:30	樹脂 2 層目流し込み、昼食休憩
13:30 ～ 15:00	樹脂封入標本を使った実践例についてパワーポイントによる講義実施
15:00 ～ 17:00	樹脂 3 層目、および研磨方法講習

参加者の声（一部抜粋）

Q. 今回の研修のご意見・ご感想について

研修内で紹介されていた道具・材料について、いくつかは早速手に入れ、今回作製した標本の研磨を始めています。教えていただいた内容を忘れてしまわぬように、近いうちに近場の参加者に声をかけて振り返りの体験をしてみたいと思っています。

博物館の展示に活用できるワークショップは、大変役に立つと感じました。今後も、様々なワークショップを開催していただけると嬉しく思います。

講師の先生のお話興味深く、また標本そのものに興味のある方々が集まっていたので、非常に楽しかったです。ありがとうございました。



科学館的ミュージアム・マネジメント（事業点検編）

～人と科学をつなげるサイエンスコミュニケーションを目指して～

北海道青少年科学館連絡協議会

概要、テーマ、ねらい

科学館では、地域の方々に科学や科学技術を伝えることや子どもたちに“科学する心”を育むことなどを目的に、さまざまな取り組みを行っている。一方で、社会や地域のニーズは多様化し、応えきれていない課題がある。今回の研修では、改めて私たち科学館のミッション達成のためにどのような視点が必要なのか、また、よりよい事業を行うための企画のポイントや自己評価の進め方など、これからの科学館に求められる取り組みについて考える。

なお今回の研修では各館の教育プログラムの情報共有の機会を設けたり、グループワークをしたりと、参加者同士の意見交換や交流を重視して進めていくこととした。

- 会 場：札幌市青少年科学館
- 講 師：小川 義和（国立科学博物館）
小川 達也（国立科学博物館）
- 参加者：北海道青少年科学館連絡協議会加盟館、
北海道博物館協会加盟館
計17施設23名



スケジュール

11月15日	
14:30～14:40	イントロダクション 参加者自己紹介等アイスブレイク
14:40～15:30	講義① 「博物館におけるサイエンスコミュニケーションとは」 小川義和（国立科学博物館）
15:30～15:40	休憩
15:40～15:45	グループワークに関する紹介
15:45～16:00	札幌市青少年科学館事例紹介 （子どもたちと一緒に科学館づくり）
16:00～16:50	グループワーク① 各施設の事業の把握
16:50～17:00	初日のとりまとめ

11月16日	
9:00～9:20	講義② 「学習支援事業を分類する」 小川達也（国立科学博物館）
9:20～10:20	グループワーク② 事業の分類軸の検討
10:20～10:30	休憩
10:30～11:30	各グループからの発表
11:30～11:50	質疑応答、意見交換
11:50～12:00	まとめ

参加者の声（一部抜粋）

Q. 今回の研修を受けて、気付いたこと、学んだことについて具体的に教えて下さい。

「サイエンスコミュニケーション」の意味の広さに驚きました。講義の中でお話があったように、これからは博物館内だけでなく、地域と広く連携することが、地域の博物館には求められていると思いました。

事業点検の必要性を理解できた。事業の廃止・継続を決定する際に今回学んだ方法を実施するのの一つの方法だと思った。また分類基準の軸を作ることは思っていたより大変であることが分かった。

サイエンスコミュニケーションを活かすことで、展示物に頼り切らない科学館ができる可能性に気付いた。



博物館施設における多言語化

道南ブロック博物館施設等連絡協議会

概要、テーマ、ねらい

道南地区においては、函館市を中心に多くの地域で多数の訪日外国人旅行者が訪れている。博物館施設等へも訪日外国人旅行者が訪れているが、十分な多言語化が実施されているとはいえない状況にある。

この研修では、多言語化する場合の基本的な考え方について研修を通じて学び、実践につなげた。

- 会 場：江差町保健センター
- 講 師：佐々木 秀彦（東京都歴史文化財団）
馬 上 千恵（英語講師・通訳案内士）
- 参加者：多言語化に関心のある博物館施設関係者、
観光関係者など 26 名



●講義資料の1つ
「文化施設のための多言語対応ガイド」
【発行】公益財団法人 東京都歴史文化財団
https://www.rekibun.or.jp/wp-content/uploads/2017/12/multilingual_efforts2017.pdf



●講義で紹介された多言語音声翻訳アプリ
「VoiceTra」（無償）

<http://voicetra.nict.go.jp/index.html>
国立研究開発法人情報通信研究機構（NICT） 開発

スケジュール

12月4日	
10:45～11:00	開会式
11:00～12:00	講義① 「多言語化の基本的な考え方」 佐々木秀彦（東京都歴史文化財団）
12:45～13:15	講義② 「外国人観光客を案内して感じる多言語化」 馬上千恵（英語講師・通訳案内士）
13:15～14:30	多言語化の現地見学
14:30～15:30	演習①「資料の本質を調べる」
15:30～16:00	演習②「資料の本質を多言語化する」
16:00～16:50	ふりかえり
16:50～17:00	閉会式

参加者の声（一部抜粋）

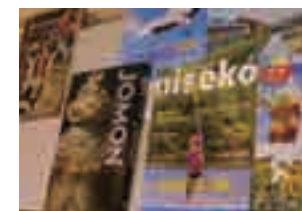
Q. 講義1 佐々木秀彦さんの「多言語の基本的な考え方」を受けてどのような気づきがありましたか？

展示解説と誘導サインでは多言語の考え方を変えても良い（誘導は英語のみでも良い）とのことから、すべてを外国語対応するのではなく、必要に応じてピクトグラムや英単語レベルの設置から取り組めると感じました。

日本語キャプションの直訳では通じないということは常々留意していましたが、特に、歴史や文化財に関わる語句は日本人なら普通に知っていることも外国人に対しては吟味が必要であると改めて痛感しました。更に、本来は「訳す」のではなく、その地域の歴史や文化を理解しているネイティブの方に「書き下ろし」で頂くということも、これからは真剣に取り組み、そういった人材を見つけ、関係を築く必要があるとも思いました。

Q. 講義2 馬上千恵さんの「外国人観光客を案内して感じる多言語化」を受けてどのような気づきがありましたか？

日本語解説をそのまま翻訳することはNGであるとのこと説明は、ある意味ショックであるとともに、まずはネイティブに文章を作成してもらい、次に英語を専門とする日本人にチェックしてもらうという段階を踏む必要があるとの説明をお聞きし、目から鱗でした。その他、英語表現のルールのご説明も大変参考になりました。



博物館の展示制作について考えよう

北海道博物館協会 道東3管内博物館施設等連絡協議会

概要、テーマ、ねらい

年に数回開催する企画展示の制作、常設展示のリニューアルなど、博物館活動において展示を制作する機会は数多くある。その一方で、実際の展示制作について学芸職員が実践的に学べる機会は少なく、各館で工夫しながら実施している。この研修では、博物館の展示制作の基本的な考え方について学び、また参加者同士が意見を出し合い、それぞれの実践例を共有することで、今後の活動につなげていくことをねらいとした。

- 会場：釧路市立博物館
- 講師：洪 恒夫（東京大学総合研究博物館）
- 参加者：展示制作に関心がある博物館施設関係者 31名



スケジュール

2月20日	
13:00～13:30	イントロダクション
13:30～15:00	釧路市立博物館の紹介、展示解説1・見学
15:00～15:50	グループワーク1（展示の検証1）
15:50～17:00	講義「展覧会の作り方」で留意したいこと」

2月21日	
9:30～10:00	洪氏の展示製作解説・ノート紹介
10:00～11:30	展示解説2、グループワーク2（展示の検証2）
11:30～12:00	演習・ふり回り

参加者の声（一部抜粋）

Q. 講義やグループワークを通じて、どのような気づきがありましたか？

伝えたいコンセプトを作る仲間としっかりとにぎりあうことやメインテーマをしっかりと決めるなど基本的だけどそれが大事ということを実感しました。そして、それを伝えるためにより効果的なデザインを考えること、デザインがすてきではなく伝えるために伝えるためのデザインということを考えさせられました。

Q. 今回の研修のご意見・ご感想について

展示準備をまず物の選定から始めるようなところがありますが、コンセプト決定→空間配置→物の選定という流れもあることを知れて良かった。

生物と、その生息環境そのものをどのように見せるか、（ビオトープ等に）応用していけたらと思う。飼育動物は個々の個体を見がち、見せがちであり、そこからどのように種や生息環境、人間との関わりに目を向けてもらえるか。今後、手法を活かしていけると思う。

巡回展

「生命のれきしー君につながるものがたりー」

概要

北海道内の博物館関係者を対象とした研修やシンポジウムを行う一方、地域博物館と国立科学博物館の協働で、展示や学習プログラムを実施した。事業の実践を通じて、学芸員同士が出会い、お互いのノウハウを学び合うことで、それぞれの博物館の今後の活動を魅力的なものにするということをねらいとした。

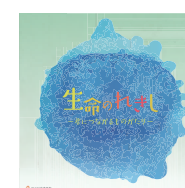
展示にあたっては、地球の誕生から現代までを化石を中心とした資料で紹介する国立科学博物館の巡回展示「生命のれきしー君につながるものがたりー」を2館で実施した。本展示は、国立科学博物館の資料73点を活用し、資料とパネルをセットとして制作した組立型の展示物である。

会場	会期	入場者数
北海道博物館	平成30年12月8日(土)～平成31年1月20日(日)(31日間)	13,101名 (前年度比250%)
北網圏北見文化センター	平成31年1月29日(火)～平成31年3月3日(日)(33日間)	2,025名 (前年度比219%)

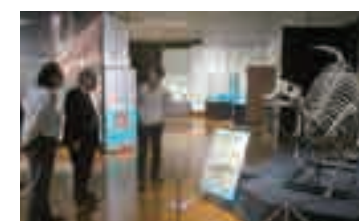
●展示タイトル

「生命のれきしー君につながるものがたりー」

●展示概要



地球が誕生してから46億年。私たちヒトが誕生するまでの間、地球やそこに住む生き物たちはどのような道のりを歩んできたのでしょうか。約38億年前の地球最古の岩石、ようやく現れた大型生物エディアカラ生物、最初の脊椎動物、陸上に進出した動植物の化石、恐竜の全身骨格、そして私たち哺乳類の化石などの標本・資料が、地球のれきし・生命のれきしをかたる、46億年のものがたりです。



北海道博物館での実施

北海道博物館では特別展会場において本展示を展開した。展示自体は特別展会場だけで完結するものの、「えほん meets 博物館」や「始祖鳥をつくってみよう!」など、巡回展示の内容と北海道博物館の総合展示室（常設展）内の展示とをうまく結びつけるようなイベントを実施することで、より一層、博物館の魅力を感じてもらえるような工夫を行った。

実施イベント

えほんmeets博物館

- 日時：①平成30年12月15日 10:30～11:30
②平成31年1月19日 10:30～11:30
- 講師：圓谷 昂史（北海道博物館）
（①は国立科学博物館の職員も立会い）
- 対象：5歳～小学校3年生以下のお子様と保護者（2名1組）
- 参加者：①9組18名 ②9組17名 計35名

アロサウルスになってみよう！

- 日時：平成31年1月5日～平成31年1月12日
各日13:30～15:00
- 講師：圓谷 昂史（北海道博物館）
- 対象：どなたでも
- 参加者：計492名

ちゃれんが子どもクラブ「始祖鳥をつくってみよう!」

- 日時：①平成30年12月16日
[第1回] 10:30～12:00
[第2回] 13:30～15:00
②平成31年1月20日
[第3回] 10:30～12:00
[第4回] 13:30～15:00
- 講師：表 溪太（北海道博物館）
- 対象：小学生・中学生（小学生以下は保護者同伴）
- 参加者：計119名



北網圏北見文化センターでの実施

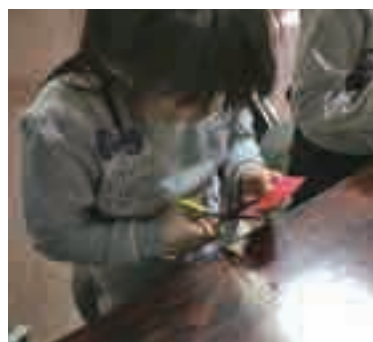
北網圏北見文化センターでは、常設展示室の中に本展示を組み込む形で展示を展開した。これにより、シンボル展示となっている北見市産のデスモスチルスの全身骨格等を「生命のれきし」の中で紹介することができ、常設展示室の展示資料の意味や魅力について改めて来館者に気づいていただくきっかけとすることができた。



実施イベント

化石のレプリカをつくってみよう！

- 日 時：①平成31年2月9日
[第1回] 10:30～12:00
[第2回] 14:00～15:30
②平成31年2月23日
[第1回] 10:30～12:00
[第2回] 14:00～15:30
- 講 師：中村 雄紀
(北網圏北見文化センター)
- 対 象：どなたでも
- 参加者：計120名



ギャラリートーク

- 日 時：①平成31年3月2日
13:30～14:00
②平成31年3月3日
13:30～14:00
- 講 師：中村 雄紀
(北網圏北見文化センター)
- 対 象：常設展観覧者
- 参加者：計78名

事業の効果

どちらの開催館でも、前年同期比で2倍以上の入場者数となった。国立科学博物館の標本だけでなく、地域博物館の持つ資源(常設展示)をあわせた博物館活動を展開することが功を奏したと思われる。結果として、来館者の展示満足度が84%を超える(北海道博物館)など、魅力ある博物館活動を、地元の方々に届けられたと思われる。

また、協働事業の実践を通じて学芸員同士が出会い、学び合うことで、それぞれのノウハウを共有し、双方の今後の活動への刺激とすることができた。これらのネットワークを今後も維持・発展させていくことが期待される。

シンポジウム

「地域の情報発信拠点としての博物館 ―観光と博物館の連携をさぐる―」

道央地区

概要、テーマ、ねらい

近年、外国人観光客の増加、観光のスタイルの変化に対し、観光による地域活性化などの取り組みが増加しつつある。その中で、歴史、くらし、自然、芸術など、地域資源にかかる「もの」と「情報」を集約、発信している博物館への期待は大きい。地域資源の情報の集積・発信拠点である博物館が、どのように「観光」と連携してゆくべきかというのは、喫緊の課題のひとつである。本シンポジウムでは、博物館、観光業界などそれぞれの立場からの意見を共有し、相互に対する理解を深めることで、互いの強みを活かし、観光客、利用者、地域住民にとって意味のある望ましい連携の在り方について議論する契機となることを目的とした。

■会 場：北海道博物館

■参加者：56名

プログラム

平成31年1月18日(金) 13:00～16:30		
基調講演	「観光立国時代における博物館の役割」	北海道博物館 石森 秀三
講演1	「沖縄観光における財団の役割と沖縄美ら海水族館の取り組みについて」	(一財) 沖縄美ら島財団 並里 力
講演2	「観光業界からみた博物館への期待」	(公社) 北海道観光振興機構 田中 洋一
講演3	「博物館から見た観光と利用者」	小樽市総合博物館 石川 直章
パネルディスカッション	「地域からの情報発信と博物館」	司会 国立科学博物館 小川 義和 パネリスト 講演者4名



参加者の声(一部抜粋)

Q. 本日のシンポジウムの感想を教えてください。

札幌圏の話に加え、美ら海(沖縄)に関する内容を聞くことができて良かった。また、二者でだいぶ観光客と博物館の関係に関する取り組みに大きな違いがあったので、聞いていて参考になった。

地域によって抱える観光の取り組み方が異なり、その地域にあった事業を考えて実行する難しさを知ることができました。また、時代の流れに合わせて先読みし、いかにその時代に合わせた取り組み方を生かしていくかが鍵になるのかなと感じました。なかなかこういった話を直で聞くことがないので、貴重な時間を過ごすことができました。

Q. 特に印象に残った内容やテーマなどありましたら教えてください。

水族館の話がとても印象的であった。地域との連携が重要なのだということがよくわかった。

デジタル化が進む世の中において、インターネット等の検索では調べきれない情報を博物館(学芸員)が提供すべきだというお話が興味深かったです。



「学び」の場としての研修・連携事業

平成 30 年度は、学芸員には様々な要因によって「学び」の機会が少ないという観点から、受講の希望が多かった研修やシンポジウムの実施、展示や学習プログラムの共同実施によるノウハウの共有などを行った。

研修やシンポジウムにおける「学び」の内容としては、館に戻ってすぐに活用できる実践的なものや、より広い視野で館の活動をとらえるための「考え方」「意識」を学ぶものなど、短期的にも長期的にも博物館の魅力向上につなげられるようなテーマを設定した。特に座学だけでなく、実習的な作業を盛り込むことによって、自館での活動につなげられるような内容とした。また講師への質問を事前に挙げてもらい、講師には質問内容を踏まえて研修に臨んでもらうなど、参加者の需要にあわせた内容で展開した。その結果、「今回の研修が今後の参考になるか」という設問では、ほとんどの回答者が「そう思う」「ややそう思う」を選択。また、「今後自館で実施してみる」という声だけでなく、「すでに実施し始めた」という声も多く集まった。これは、自館に戻ってから研修内容を振り返るきっかけとして事後に web アンケートをとることで、学んだことを改めて自館で考える機会を設けたことも一つの要因ではないかと思われる。研修を通じて、博物館での業務の向上が図れるという実感は、研修参加へのインセンティブに繋がり、今後このようなサイクルが継続することを期待したい。また、本事業については、映像と報告書の形で共有を図った。映像については、北海道博物館協会が管理し、協会加盟館が視聴することができるようになっている。報告書については、実施地域へ配布したほか、当館のホームページでも閲覧できるように公開している。

「出会い」の場としての研修・連携事業

研修は個人のスキルアップの場でもある一方で、「出会い」の場としても非常に重要である。特に小さな博物館では、「自分で試行錯誤して実施している取り組みが、果たして標準的なものなのかどうか」という不安を抱えながら日々の活動を行っているという声事前アンケートでもあげられた。こういった館にとっては、スキルアップもさることながら、他館の職員との直接的な交流、情報交換などの、ネットワークづくりが今後の博物館活動の支えになると思われる。事業評価者から、それぞれの館の事情について意見交換ができる場、いわば「しらふの懇親会」の重要性について指摘されており、今回の研修では、グループワークや意見交換の場を設けるなど、なるべく道内の参加者同士の交流の場を設定するよう設けた。同時に道外や博物館関係者以外の「出会い」の場ともなった。各研修や共同展示、プログラムを実施することで、講師や観光業界、共同事業を実施した職員同士など直接的に顔をつきあわせることができたことも今回の成果の一つである。共同実施したプログラムを自館で発展させたり、さらなるプログラム開発に向けての交流が進んだりと、今後の博物館活動に寄与することが期待される。この「出会い」は、参加者だけでなく各講師にとっても貴重な機会になったと思われる。北海道内で尽力している学芸員と直接対話することを通じて、現場の課題や苦勞を知る機会となり、地域の博物館の悩みに寄り添いたいという思いを強くした講師もいた。その講師がその思いを持って今度は別の地域で活動することになれば、結果として北海道地区だけでなく他地域にもよい効果をもたらすのではないかと思われる。

今後の課題

●北海道内での研修のフォローとさらなる発展

今回の事業を一過性にしないためにも、研修の重要性や有効性を共有し、次年度以降につなげていく必要がある。今回の研修受講者による展示や資料の管理などの博物館活動の改善や変化の事例を集約し、フィードバックすることで、研修の有用性について受講者や地域博物館が実感することができるのではとの指摘が事業評価者からあった。そのような循環が動くよう、可能であれば追跡調査等によるフォローアップが望ましい。また、道内他地区での研修事業の内容を共有し、「出会いと学び」への意欲を喚起していく必要がある。研修の映像なども活用しつつ、北海道博物館協会が中心となって、今後の各地区・部会の研修の支援を引き続き実施していくことが肝要と思われる。

●他地域への展開

北海道内で実施した今回の事例は試行的な取り組みであり、さらに他の地域に広げていくことが期待されている。今回は北海道博物館協会というフレームがあり、協会事務局はもちろん、各地区・部会担当が強い熱意をもって尽力して実施することができた。他地域において同様の事業を展開するためには、県の博物館協会や中心となる機関、スタッフ、財源など、その地域の状況を踏まえた展開の仕方を検討していかざるを得ない。例えば学芸員課程を持つ大学等との連携など、博物館以外の主体も巻き込んだ展開ということも視野にいれて活動をしていくことが必要であると思われる。

【実施実績データ】

平成 30 年度の事業を数的に振り返ると下のような結果であった。

研修等実施回数	8 回
研修等参加者数	257 名
講師参加者	15 名
研修満足度	89%

巡回展示入場者数	15,126 名
展示満足度	84% (北海道博物館のみ)
関連イベント参加者数	978 名

この他、数字には表しづらいが、研修や展示等の実施のために非常に多くの関係者が携わっている。学芸員一人一人の先には、その何百倍、何千倍もの来館者や事業参加者がいることを考えると、「将来の来館者」に向けた取組を相応の規模で行うことができたのではないかと思われる。



地域博物館同士のネットワーク構築に関する
成果発信事業

事業概要・目的

過去3か年の巡回展示や研修、学芸員同士のつながりや学芸員の資質向上に資する取り組みの成果は、事業を実施した地域以外においても汎用性があるものと考えられる。また、各年度の事業成果報告や事業実施後の発展的な取り組みを共有することは、博物館同士が連携し、発展するために重要と考えられる。

そこで令和元年度は、これまでの成果の共有と普及に重点を置き、成果を発信した。

成果発信事業

これまでのレガシー事業に関する成果は、各地域内での研修映像や報告書を元に共有を行っていたが、全国的な共有は十分に行われていない。そのため、これまでの事業に携わった参画館からの実施報告とその後の発展について、シンポジウムという形で参加者に向けて発信を行った。これを通じて、各地域の博物館でのネットワーク構築に活かしてもらえることを目的とし、事業の成果とその後の発展に関する横断的な評価と共有や、地域ごとの特色や連携において有効であった手法の共有等を行い、博物館関係者同士の情報交換やつながりの創出を目指した。

平成30年度の実施においては映像でのコンテンツ配信によって、研修の参加が叶わない方も内容を視聴できるようにした。そうした成果を踏まえ、令和元年度はシンポジウム当日の内容をWebを通じて配信することで、開催当日に参加できない博物館関係者に、時間や空間を超えて、共有ができるようにした。また、こうした成果全体は記録として後世に残すため、公的な場で発表し共有を行う必要がある。その一つとして全国科学博物館協議会研究発表大会を通じて、レガシー事業の総括を報告した。



「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」 総括シンポジウム

概 要

平成28年度から平成30年度にかけて「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」において、地域博物館同士のネットワークの構築について模索してきた。3か年の事業を通じて、各地域で巡回展示や研修を行い、学芸員同士のつながりや学芸員の資質の向上に資する取り組みを行ってきた。こうした事業の成果は、事業を実施した地域以外においても参考になるものと考えられ、各年度の事業成果報告や事業実施後の発展的な取り組みを総括して、これらの成果を発信し、共有することは、博物館同士が連携し、発展するために重要と考えられる。本シンポジウムでは、「つながる」「広がる」「発信する」をキーワードに、各年度における地域博物館同士の「つながり」を構築した実施成果と、事業以後の成果の「広がり」、そして、今日の社会における役割を博物館が担っていくためにどのように「発信する」のかという点から、博物館におけるレガシー継承のこれからについて、議論を深める。

- 日 時：令和2年1月26日(日) 13:00～17:00
- 会 場：国立科学博物館
- 参加者：35名

プログラム

概要説明	国立科学博物館における「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」の概要	国立科学博物館 小川 義和
事例紹介Ⅰ	国立科学博物館・巡回ミュージアム in 岩手の成果と課題	岩手県立博物館 望月 貴史
事例紹介Ⅱ	博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業が残したもの	宜野湾市立博物館 千木良 芳範
事例紹介Ⅲ	「出会いと学び」を通じた学芸員資質向上と博物館機能強化モデルの展開	前北海道博物館協会事務局 栗原 憲一
事例紹介Ⅳ	平成30年度のレガシー事業（多言語研修）実施後の成果と課題	江差町教育委員会 宮原 浩
本事業に関する評価者からのコメント 評価者：高安 礼士、高田 浩二、洪 恒夫		
話題提供	Where culture meets nature 展の4年間の成果と課題 「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」を通じた自然史博物館力の キャパシティビルディングについて	兵庫県立人と自然の博物館 三橋 弘宗
パネルディスカッション 司会：国立科学博物館 小川 義和 パネリスト：登壇者5名		



事例紹介Ⅰ

国立科学博物館巡回ミュージアムin岩手の成果と課題

望月 貴史 (岩手県立博物館 学芸員)

●巡回展で得られた成果・残ったレガシー

岩手県は全国最大の面積を持つ「県」であり、これまで交通アクセスの悪さなどから内陸の博物館で企画展を行っても沿岸部の県民に展示を見に来ていただくことが難しかった。しかし、本巡回展で岩手県沿岸北部から南部で展示を行うことで、盛岡市から離れた地域に居住する県内外の多くの方に展示を届けることができた。また、本巡回展の展示スタイルは後の国立科学博物館巡回キット「生命のれきし-君につながるものがたり-」の基本構想に寄与することができたと考えている。

さらに、令和元年度においても国立科学博物館と岩手県立博物館の合同での巡回展（「生命のれきし-君につながるものがたり-」）を岩手県内の2地域（岩泉町と大船渡市）で実施したが、平成28年度に実施した巡回展のノウハウと人脈によって構想から準備、実際の展示から撤収までの一連の流れを極めてスムーズに進めることができた。

また、展示以外にも本巡回展では地域連携の面で多くのレガシーが残ったと考えている。

まず、三陸ジオパーク推進協議会と協力して行ったシールラリーは県内外から多数の参加者が集まった。参加者を対象に行なったアンケートでは、「これまで訪れたことのない施設にも足を運ぶ機会になった」といった声が寄せられており、展示を行った会場以外にも三陸のさまざまな場所をめぐり、三陸の新たな魅力を発見していただくきっかけを提供することができた。同様に三陸ジオパーク推進協議会との連携事業のひとつとして、久慈会場で「化石のレプリカづくり」を題材とした三陸ジオパークのガイド研修会を行ったが、これによって普段離れた地域で活動しているガイド同士のつながりを深めるとともに情報交換の場を提供することができた。同様の研修会は以降各地で行われている。

また、本巡回展に併せて盛岡会場では「教員のための博物館の日」を北東北で初めて実施した。平成28年度に行われたこの試みは、これ以降令和元年度現在まで岩手県立博物館で毎年行われるイベントとなっている。実際に参加した教員からは、これまで気づけなかった博物館の新しい利用方法を知ることができた等の好評の声をいただいで

いる。その後大船渡市立博物館でも同じイベントが実施され、内陸部と沿岸部でそれぞれの地域の教員と博物館とを結ぶ事業の一つとなっている。

●巡回展で見えてきた課題

一方で本巡回展を通してさまざまな課題も見えてきた。最も大きな課題は費用（特に輸送費）に関する問題である。往々にして巡回を行うために必要となる経費は地方博物館単独で賄うことが難しい場合があり、そうした費用をどのように工面するかといった点が重要課題のひとつとなる。

さらに巡回展の規模が大きくなるにつれて生じる問題として、展示会場そのものの広さだけでなく標本の輸送に用いる木箱等の用具の置き場の確保が必要になるという点もある。多くの博物館ではバックヤードの収容能力が十分に足りていないという問題を抱えており、博物館以外の施設ではそもそもバックヤードの機能を果たす場所が存在しないこともある。また、会場の広さによっては展示の設営を会場内だけで完結させることが難しく、追加のスペースが必要となることもある。

また、巡回展を行ったことで得たノウハウや人脈を次に伝えていくことができる人材の育成も重要な課題と言えるかもしれない。地方の博物館は必ずしもプロパー職員が学芸員を務めているとは限らず、数年で職員が代わってしまうこともある。そのため、人が代わってもノウハウを継続できるような仕組みづくりが重要になってくると思われる。



文化庁委託事業「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」の概要

国立科学博物館連携推進・学習センター長 小川 義和

「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」は、国立科学博物館と地域博物館との連携協働事業であり、博物館同士が協働で展示を実施するだけでなく、地域の学芸員向けの研修等を組み合わせることで、事業のノウハウの共有や関係者同士のネットワークの充実を図り、事業終了後にもそのノウハウやつながりを残すことを目的とした取組である。過去3か年の事業実施結果や、その後の各地域での成果から資源、人材、ノウハウ、ネットワークを共有し、継承することの重要性を認識できた。これらを継承するためには、展示資料とともに学芸員研修を通じた展示・教育・資料保存などのノウハウの習得も必要であり、また学芸員同士の双方向の学びの連鎖を継承できる環境やコミュニティが構築されていることが不可欠である。実際、国立科学博物館でも地域博物館のもつノウハウを学ぶことができ、それを本事業に生かすことができた。その点で、地域の博物館協会との連携など、地域博物館との「点としての連携」から「面としての連携協働」に発展していくことが効果的であろう。

本シンポジウムでは、3か年の事業を通じて、レガシーとして何を継承し、発信するのか。継承するためにどのようにしたらいいのか、参加者の皆さんとともに議論を深めていく。また、本シンポジウムでは「slido」*を活用し、口頭の他、スマートフォンでの質問も受付けて議論を展開する。



*「slido」とは、スマートフォンやタブレットを活用し、意見や質問を会場全体で共有することができるアプリケーションです。

事例紹介Ⅱ

博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業が残したもの

千木良 芳範（宜野湾市立博物館 館長）

国立科学博物館が実施する「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」が、2017年度には地域の博物館等連携モデル構築を目指して、沖縄県で実施された。これは、国立科学博物館の研究の成果である巡回ミュージアム「琉球の植物」を中核に、学芸員研修会及びリゾートホテルとの連携事業を実施するというものであった。県内の博物館からは、県立博物館・美術館（以下県博・美）、海洋博熱帯ドリームセンター、名護博物館、沖縄市立郷土博物館、宜野湾市立博物館の5館、及び北谷町教育委員会が参加した。

沖縄県内の市町村立等の博物館は、多くが歴史・民俗系博物館と総合博物館とで占められ、自然科学系の館は1館だけである。総合博物館のうちでも、常設展の中に自然部門を持つのは8館で、自然史系学芸員も県全体で約7人ととどまる。今回の事業では、沖縄本島に所在する自然史系の学芸員のいる館はすべて参加してもらった。基本の展示は国立科学博物館の制作した「琉球の植物」の展示キットを用い、それぞれの館では地域資料を活用して独特の味付けをし、同じ展示が巡回するというイメージを与えないように工夫した。そのため各館の個性が際立ち、それぞれの館の特徴を再認識することができた。結果としては、県立博・美を中心にした連携、協力体制がうまく機能し、交流の少なかった館園同士がうまく連携できたことが大きな成果としてあげられる。

一方で、自然史系学芸員の配置されていない館における取組みが課題として残された。こうした館の職員は、大学等で自然科学を専攻してきたわけでもなく、自然科学系の人的ネットワークも小さい。そのため、展示内容に自信が持てないと、企画展の開催や常設展の展示替えもままならない状況がある。今回の事業を通して構築された、県博・美を中心にしたネットワークは、こうした状況を打開する一つのきっかけとなるかもしれない。本事業の終了後、2019年5月に開催された沖縄県博物館協会の春季総会では、「つながる博物館」をメインテーマに活動することを掲げ、同年10月の秋季研修会においては、県博・美がどのような収蔵品を保管しているかを知るための研修会を行った。これは県博・美の収蔵品を市町村立の博物館等で積極的に活用することを目的にしたもので、その先陣をきって、宜野湾市立博物館が県博・美の資料を活用した「大昆虫展（2018年度）」と「化石展（2019年度）」を実施した。また、宮古島市立総合博物館は、琉大資料館、県博・美と連携した「昆虫展（2019年度）」を開催している。一方で、学芸員同士の連携から生まれた企画展としては、東

村立山と水の生活博物館の「紙細工で見る沖縄の動物展（2019年度）」と「やんばるカエルの王国展（2019年度）」が実施されている。こうした県博・美を中心にした館園や学芸員同士のネットワークは、自然史系学芸員の配置されていない館にとっても、大きな自信を与えるかもしれない。

沖縄県においては、県博・美と琉大資料館（風樹館）以外は、全国科学博物館協議会にも所属しておらず、県内で自然史系の研修会が実施されることもまれである。市町村立博物館は正職員数が少なく、嘱託や非常勤職員が運営の主体となっている。また、ほとんどの館で旅費が計上されていないので、学芸員が研修会等に参加することができない。今回のレガシー事業では、アルバム辞典を作ろうと封入標本作成実習の2件の研修会を行った。いずれも参加者は定員いっぱい、需要度の高さを裏付けていた。内容も好評で、アルバム辞典では新たな展示の見つけ方を学んだという感想が、封入標本作成では、専門の人に細かい点が質問できてよかったなどの感想が多かった。その一方で、より実践的な技術研修の機会を望む声も多かった。

最後に博物館の新たな役割として、博物館の持つ情報を観光客に向けて発信する事業を試みた。県内のロワジュールホテル（那覇市）とヒルトンホテル（北谷町）において、ミニ展示と体験コーナーで実施した。ホテルのロビーを使用しての開催であったが、ホテルの使用規定（制限）などとの調整が必要と感じられた。個人的には、観光客も地域に訪れる人々であるので、地域の自然、歴史、文化について、地域の人々と同様に広報していく必要があると考えている。ただ、具体的な方法をまだ示していないのが現状である。こうした実情にかんがみると、国立科学博物館と県博・美または沖縄県博物館協会を主軸にした連携システムの構築、継続的な研修計画が必要であり、これによって学芸員同士の結びつきを強化していくことがもっとも重要である。今回のレガシー事業は、その基礎づくりとしては十分なものであった。



事例紹介Ⅲ

「出会いと学び」を通じた学芸員資質向上と博物館機能強化モデルの展開

栗原 憲一（前北海道博物館協会 事務局次長（株式会社ジオ・ラボ 代表取締役））

●事業のねらい

平成30年度は、北海道博物館協会、北海道博物館および国立科学博物館が連携して、地域博物館及び博物館職員の活動の活性化に資するべく事業を実施した。

具体的には、「『出会いと学び』を通じた学芸員資質向上と博物館機能強化モデルの展開」というテーマで、研修やシンポジウム、展示やプログラムの協働を通じた博物館関係者同士あるいは他業種との「出会いと学び」によって、北海道内の博物館関係者に刺激をもたらし、ひいては道内の博物館の機能強化に寄与することを目指すものである。

●事業の概要

北海道内には博物館等の文化施設が約280館あり、その約半分弱の120館が北海道博物館協会に加盟している。当協会では、これまで各地区、各部会、連絡協議会などで研修会を定期的に開催していたが、多くは加盟館同士の事例共有を中心としたものであった。そこで今回、国立科学博物館の職員や、国立科学博物館のネットワークを活用した講師等を派遣することで、これまで直接話を聞いたり、実習を行なったりする機会が必ずしも多くない内容を取り上げて研修やシンポジウムを実施した。

また、国立科学博物館で制作した巡回展やイベントを道内の博物館と協働して実施することで、お互いの手法や考え方を共有し、互いに今後の活動のヒントとなるような連携事業を実施した。実施した事業は下記の通りである。

地区	実施場所	実施内容	実施日
道央	三笠市立博物館	イベント「えほん meets 博物館」	9月23日
道央	滝川市美術自然史館	イベント「えほん meets 博物館」	9月24日
学芸	美幌博物館	資料の取扱と修復について	9月28・29日
日胆	豊浦町旧礼文華中学校	展示発見カードをつくらう！	10月16日
道北	士別市立博物館	研修会「樹脂封入標本を作ってみよう～地域の自然を残す工夫・伝える工夫～」	10月27日
網走	美幌博物館	研修会「樹脂を使った標本作成ワークショップ」	10月28日
科学	札幌市青少年科学館	科学的ミュージアムマネジメント	11月15・16日
道南	江差町保健センター	博物館施設における多言語化	12月4日
道央	北海道博物館	巡回展「生命のれきしー君につながるものがたりー」	12月8日～1月20日
道央	北海道博物館	シンポジウム「地域の情報発信拠点としての博物館ー観光と博物館の連携をさぐるー」	1月18日
網走	北網走北見文化センター	巡回展「生命のれきしー君につながるものがたりー」	1月29日～3月3日
道東	釧路市立博物館	博物館の展示制作について考えよう	2月20・21日

●事業全体を振り返って

道内の博物館では、学芸員が一人だけという館が多く、人文系の学芸員であっても自然史標本の寄贈受入を行うと

いった、自分の専門外の資料を扱わざるを得ない場面が多くあり、地域の博物館職員は危機感を抱いていた現状がある。しかしながら、地理的に本州と離れているため、道外の研修会に出張で学びに行くということも難しい現状があった。

一方で、そうした現状があることから、北海道博物館協会としての地域のネットワーク活動は活発である側面があった。そこで、今回のレガシー事業を通じて、これまでの地域内における事例共有という“内”からの学びに加えて、本州等の第一線でご活躍する外部講師による“外”からの学びを展開することができたと感じている。とくに、これまで交流していなかった“内”と“外”との交差点（交流）ができたことにより、外部講師も含めてみんなでお悩み相談のような場面ができたことが印象深い。

研修にあたっては、すぐに自分達の活動に活かせる内容をという声が多くあったため、文化財を守るための「伝えるべき」理論と、現場の職員が「できる」実践を伝えてほしいという要望を出し、講師の方々にはそのことを意識して研修を行っていただいた。そのため、参加者からは後日、「収蔵庫をこまめに掃除するようになった」「自分で封入標本を作ってみた」「地域の子どもたち相手に展示カード作りを行った」「事業を企画する際に、類型化して考えるようになった」という声を複数聞いており、有意義な研修会等を開催することができたと感じている。

今後は、今回得た経験と人の繋がりを活用して、こうした研修会等を持続的に行うための仕組みづくりを検討していくことが重要であろう。それは単に、外部講師を呼ぶための予算をいかに確保していくのかという視点だけではなく、講師から学んだ知識・技術を学芸職員自身がいかに実践として身につけ、彼ら自身が次の“伝え手（継承者）”として次の世代へ伝承していくことが、まさにレガシー継承事業になるだろうと考える。



事例紹介Ⅳ

平成30年度のレガシー事業（多言語研修）実施後の成果と課題

宮原 浩（江差町教育委員会（学芸員））

●平成30年度レガシー事業（多言語研修）の概要

道南ブロック博物館施設等連絡協議会では、国立科学博物館・北海道博物館協会とともに、平成30年12月4日（火）に「博物館施設における多言語化」と題した研修会を開催した。

この研修会は、国立科学博物館が文部科学省（文化庁）委託事業「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」の一環として取り組んだもので、「[出会いと学び]」を通じた学芸員資質向上と博物館機能強化モデルの展開」をテーマとしている。具体的には、博物館関係者同士や他業種との「出会いと学び」によって、博物館の機能強化に寄与することを目指した。

講師として、佐々木秀彦氏（東京都歴史文化財団）と馬上千恵氏（英語講師・通訳案内士）をお招きした。特に馬上千恵氏は、北海道南部を中心に外国人訪日客を博物館施設などに案内している方で、さらに博物館施設や観光施設などの多言語化も手掛けられている。馬上千恵氏には「外国人観光客を案内して感じる多言語化」と題した講義をいただき、他業種との「出会いと学び」というテーマに則した研修をしていただいた。

研修会では、講義はもとより演習に時間を割いた。まずグループごとに展示を想定する資料1点について、日本語での解説文を共同で作成した。この作業によって、日本語で記す日本人向けの解説がわかりやすい文章であるかの確認も行った。次に、グループごとに作成した日本語での解説文を馬上千恵氏が英語翻訳した。その際には当地域の外国語指導助手にも入ってもらい、表現や外国人に伝わりにくい事柄の追加説明を加えるなどネイティブチェックをもらった。

これらの多言語化作業は様々な多言語化ガイドラインにも提示されている作業で、実際に演習してみることで、自動翻訳などを用いた意味の伝わりにくい文章では博物館としての魅力が減ってしまうことを理解した。また、あわせて日本語の解説文が本当にわかりやすい文章であるのかを確認する機会ともした。

●事業後の成果

現在、我が国は、東京オリンピック・パラリンピックを迎えるにあたり多くの外国人訪日客を受け入れる体制作りを進めており、文化庁や観光庁などが連携した補助事業も用意されている。

例えば、観光庁の「地域観光資源の多言語解説整備支援事業」は、各地域の文化財や国立公園などの魅力を多言語で発信するために、観光庁でリスト化したネイティブ

ライターとエディターを地域に派遣して解説文とガイドラインを作成する補助事業として設けられた。

多言語化を進めるに当たって戸惑うことのひとつに、誰に多言語化を依頼するのが挙げられる。前記の補助事業も、観光庁において信頼できるネイティブライターをリスト化して紹介することが主眼となっている。

しかし、補助事業は実施しようとする内容と補助事業の内容とが合致しないことも多い。

当研修会の成果のひとつに、地域に在住し専門的な知識と技能を有する馬上千恵氏を紹介することができたことが挙げられる。

研修会終了後、馬上千恵氏に多言語化を依頼した施設が数館あった。そのうち北海道坂本龍馬記念館の取り組みについて紹介する。

北海道坂本龍馬記念館は、本研修事業の後に施設のキャッチコピー案の多言語化（英文）を想定し、研修事業の講師であった馬上千恵氏へ相談をした。すると、馬上千恵氏から北海道の補助事業の紹介があり、多言語化の内容を拡大して現在取り組んでいる。

北海道坂本龍馬記念館の担当者からは、「多言語化を実施するにあたり、坂本龍馬や幕末のことをよく知らない人が見てもわかりやすい文章を作成することは、良い経験となっている。今まで自分が話したり書いたりしたことは、そのような目線ではなかった」「今までの当たり前を取っ払って考える大切さを感じている」との感想を得ている。

さらに、令和2年2月から3月にかけて北海道が主催した「訪日外国人旅行者向け観光案内ガイド育成研修」は馬上千恵氏が講師を務めたが、研修会を通じて知り合った多数の博物館関係者の参加を見た。

冒頭にも記したが、「[出会いと学び]」を通じた学芸員資質向上と博物館機能強化モデルの展開」が本研修会の目的であったが、研修会を開催する機会を得たことにより当地域ではその成果を上げることができた。



話題提供

Where culture meets nature 展4年間の成果と課題

「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」を通じた自然史博物館力のキャパシティビルディングについて

三橋 弘宗（兵庫県立人と自然の博物館 主任研究員）

文部科学省（文化庁）委託事業「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」では、①国立科学博物館を中心とした全国の博物館との連携プログラムと、②兵庫県立人と自然の博物館を事務局とした歴史的建造物を活用した移動展示の2つの大きなプロジェクトが2016年から2020年にかけて実施された。私は、幸いにも2つの事業に関わらせて頂き、国立科学博物館の皆様と様々な面で意見交換させて頂いた。①の事業では、北海道および沖縄での博物館学芸員講習会の講師として、封入標本ならびに樹脂含浸の展示技法について実習を行った。②の事業では、事務局局長で実質的な責任者として事業運営し、国立科学博物館には展示やセミナーの運営において様々な観点からご支援頂いた。

国立科学博物館が事務局を担って実施された博物館ネットワーク事業では、封入標本の製作等をテーマとして、北海道では道北地区（士別市立博物館）と道東地区（美幌博物館）の2カ所での実施、一方、沖縄では全県を対象とした那覇市（県立博物館）にて実習を行った。参加者は、其々の地域の中小規模の博物館スタッフや学校教員、環境教育を担う指導者の方であり、両地区ともに実習意欲が高く、生涯学習等の経験豊富な方ばかりであった。樹脂封入標本の製作技術実習および展示や環境教育への活用について解説したが、どちらの地域でも、すでに予備知識や作業経験がある人が大半をしめた。特に、沖縄では経験が豊富だが、もっと上手く作りたいという高度技術志向の方が多い印象を受けた。活用のイメージも明確であり、多くが館内での企画展や学校対応のキットを想定しており、各自で製作したい標本を持参しての参加だった。実習中も実習後においても、各地区ともに数多くの質問、時にはかなりマニアックな質問もあった。これは、両地区ともに共通することだが、学芸員や関係者に生物学の堅実なバックグラウンドを持つ職員が多かったことに起因すると思う。大学や交友関係を通じて、封入標本などの標本づくりに慣れているという基盤も関係して、技術への欲求が高いように感じた。開催後も、数多くの質問を頂いたり、自主的に各館行事として講座を実施されたようだ。その意味では、この講習会を通じて、地域ネットワークを通じたキャパシティビルディングとなったように思う。常勤の専門職員が配属されて、そのうえで実践的なテーマで、かつネットワークを通じた複数の共有型の講習であったことの意味は大きく、このスキームは今後の博物館学芸員向けの技術講習のやり方として大切なように思う。

実習のなかでは、②で挙げた歴史的建造物を活用した移動展における標本活用方法について事例を元に紹介した。こちらは、新規性もあることから、イメージが難しかった人もいたが、博物館による観光振興や地域創生といった施策課題を本庁から宿題として投げかけられている方には、親和性の高い内容となった。また、高校生による展示会の実施という観点から移動展を取り上げたところ、今回の樹脂封入の技術などが教育プログラムに包括できると殆どの方が感じたようだ。費用や時間なども含めて、実現方法を紹介したが、こうしたアウトリーチへの活用を期待したい。開催後、道東チームからは、昆布や海藻の標本製作についての実習依頼が改めてあった。巨大な昆布の樹脂含浸標本の製作を2019年4月に斜里で実習方式で行い、技術移転した。昆布の展示は、道内のどの地区からも郷土の地域資源であるため、ニーズはあるが技術がない状態であったことから歓迎された。今後、樹脂封入などの技術講座を博物館スタッフや関係者を中心に行うとすれば、このように地域ニーズをあらかじめ聞いておいて実施すれば、より活用方法を含めた博物館交流になるだろう。いずれにせよ、こうした博物館ネットワークを通じた講習会は、多様なニーズに対応をすることが余儀なくされる自然史系博物館にとっては、今後もより一層重要な要素となると考えられるため、継続して実施できる体制の確立が求められる。



写真：道東地区の博物館スタッフが再び集まり、昆布の樹脂含浸標本を作製している様子。



パネルディスカッション

司 会

小川 義和 (国立科学博物館連携推進・学習センター長)

パネリスト

望月 貴史 (岩手県立博物館 学芸員) 宮原 浩 (江差町教育委員会 (学芸員))

千木良 芳範 (宜野湾市立博物館 館長) 三橋 弘宗 (兵庫県立人と自然の博物館 主任研究員)

栗原 憲一 (前北海道博物館協会 事務局次長 (株式会社ジオ・ラボ 代表取締役))

●会場からの質問

Q ここでいうレガシーとは、どんな意味？博物館が持っている資料などの「博物館資源」の意味？それともこの連携事業の成果のこと？

【小 川】これは捉え方がいろいろあると思いますが、ここでのレガシーとはこの事業が終わった後も残って繋がっていくものを意味します。この資源というのは博物館資源の意味ですが、博物館資料だけでなく博物館の人材やノウハウを含めて博物館資源と考えていかなければと思います。そしてこの事業ではノウハウや人、知見など様々なことを組み合わせて実験的にいろいろなことをやってみたということで、そのうちのどれが残っていくか、残りやすいか、また将来に向けて発展するのかということを確認してきました。

Q 岩手県博望月さんへ。将来的には「教員のための博物館&ジオパークの日」にできないでしょうか？学校教員にとっては、博物館もジオパークもそれぞれ地域の学習資源なのですから。

【望 月】ジオパークは地域資源にもなっていますので、これはとても良い考えだと思いました。実現の可能性を探りながら提案してみたいと思います。ジオパークが学校教育現場に役立っているというのはすでに実証されており、三陸ジオパークでは実際にジオサイトで学校教育の地域学習向けの授業を展開しています。小学生の団体がジオサイトのガイドに地層の説明をしてもらったり、地元の成り立ちを説明してもらうなど授業の一環としての取り組みは始まっています。ガイドも大学から地学を学んできた専門の人ではなく一般の方です。ジオパークは地元の人々が地域資源を使ってなにかをするということが非常に大切なことでもあるので、そういった方と連携して博物館活動と「教員のための博物館の日」を巻き込んでいけるのではないかと考えています。

【千木良】博物館の一つの役目として地域の子供たちに自分の地域のことを教えるということがあります。宜野湾地域の大きな特徴は石灰岩台地の上に成り立っていることです。当館常設展の唯一の自然史展示は石灰岩の話です。なぜそこに石灰岩ができたのか、石灰岩であったことがどのような所でみなさんの生活に関連しているのかなど説明しています。そういった意味では、一つの地域理解として地質的なものが特徴になっていることがジオパーク的な発想になっていくのではないかと思います。



Q ホテルとの協力の取り組みの例があったが、企業の展示館との連携により、産業活性化につなげる道はないだろうか。

【千木良】企業の展示館という沖縄県の博物館協会にはいくつかあります。玉泉洞という大きな洞窟を観光施設化した玉泉洞ミュージアムや、最近できたのは石灰岩の浸食地形を展示物にした大石林山がありますが、とくに連携してなにかをやったことはありません。琉球村という観光施設もありますが、観光としてやるにはバックマージンを考えないといけないので、公共の施設とはやりにくいのではないかという話をしました。経費の負担や収入をどのように分けるかが難しいと思います。調査研究に関してはかなり協働しています。県立博物館が玉泉洞で発掘調査を行い、沖縄の旧石器時代のさまざまな発見があるなど全面的な協力をさせてもらっています。

【小 川】ホテルと実際に連携してきましたが、ホテルにはホテルの事情があるので先方の事情がわかったという点では良かったと思っています。博物館側が待っている事業からアウトリーチをしていくことではっきりわかったことですので、そういった取り組みは今後も何らかのかたちでやっていけると良いと思っています。今回は企業との連携はなかったのですが、北海道では JR 北海道と連携してアニメとコラボしました。

【栗 原】北海道観光振興機構が北海道内をめぐるスタンプラリーで「ゴールデンカムイ」とコラボしました。観光として、観光客のみなさんと博物館との連携が少しずつ行われています。「ゴールデンカムイ」はアイヌの人たちがたくさん出てくるので、漫画に出てくる衣服や道具が実際に展示されているのが博物館ということで、コラボしやすかったと思います。最近では、北海道観光振興機構が学校の教育旅行による北海道への誘致に取り組んでいます。北海道の歴史・自然を学ぼうとしたとき、博物館見学を入れた形で行程を提案しています。その際、博物館の職員も一緒に本州の学校へ行きプロモーション活動をするなど少しずつ連携ができていく状況です。

Q 「教員のための博物館の日」だけでなく「学芸員のための学校の日」も必要と思います。博学連携と言いながら、指導案が書けない読めない学芸員がいるのが大半です。カスタマー目線、マーケティングのために教育資源を活用してくれる相手の文化や事情を学ばなければ、相思相愛関係が生まれないと感じます。

【小 川】相手の事情が分かるというのはとても重要なことで非常におもしろいことだと思います。一方的に「教員のための博物館の日」を行って教員に博物館を知ってもらうだけでなく、行うことによって実際に学芸員が教員のことを知ったり、学校の事情が分かたりするという相互に学ぶ機会があると思います。それを象徴的に「学芸員のための学校の日」というものが必要なかもしれません。新しい学習指導要領にも、社会に開かれた教育課程というのがキーワードになっていますので、非常にタイミングが良いと思います。

Q 岩手県博望月さんへ、巡回展の企画には、地域の博物館、町民会館の学芸員、スタッフはどういうように参加したのか？実施後の各地域での反応や発展的な活動は？

【望 月】どういったかたちで参加したのかについてですが、大船渡市立博物館さんと久慈琥珀博物館さんは学芸員がもともといたので、一緒に打ち合わせを行いながら各地の特色のあるイベントや展示をどのようにするか実務者会議を開いて決めました。ただ、岩泉町は開催場所が町民会館で博物館ではありませんでした。そもそもなぜ、町民会館で開催したかというと実は挑戦でもありました。博物館以外でも展示ができるのではないかと、必ずしも博物館でないと巡回展が開催できないようであれば、それはその博物館に行って企画展を見れば良いことになってしまうので、あえて博物館でない場所を選びました。ここは岩泉町の教育委員会の社会教育室の方に協力を依頼して、会場の確保や設営などをお願いしながら進めていきました。実施後の各地域での反応ですが、とくに岩泉町に関しては台風の影響により非常に悔しい思いもしました。先ほどの説明と少しかぶりますがそのときのノウハウがあったので国立科学博物館さんにもお手伝いいただいて今年度きちんと実施することができました。これはやはりつながりを利用できたのではないかと、レガシーとして非常に大きかったのではない

かと考えています。今年度開催した時も想定の2倍くらいの800人弱の人にきていただき、その中には前回も来てくださった方がいました。28年度に開催できなかったのですが、実施したことがある程度残っているということも確認できたと思っています。ただ、これを継続していくのが大変なので、今後考えていかななくてはいけないと思っています。

Q 沖縄では各館をまたいで観覧した方はどれくらいいましたか？

【千木良】大変申し訳ないですが、具体的な数字は出ていません。先ほどの発表の中でも、おおよその来場者数をお話しましたが、その分析が全然出ていないことが事業終了後の大きな課題として残るのではないかと各館に投げかけています。ただ、日頃の業務に追われていることもありそこまで手がまわっていないようです。この巡回展を全館まわってくれたご家族が2家族いました。リピーターの方がいる中で、そういった方に私たちはどのような広報をしたのかと考えさせられました。

Q 近年、オープンサイエンスなどの取り組みがなされている。世の中には個人の研究者が注目されることもなく、孤立無援で埋もれているが、当該事業でそれらを掘り起こし、支援に繋がらないだろうか。こういった動きに巻き込んでいくことができれば相互に活性化していくのではないだろうか。

【小 川】オープンサイエンスは色々なところで言われており、サイエンスコミュニケーションもその一つだと思います。個人の研究、市民の研究がこの成果に生かされ、またはこの展示やプロジェクトに紹介されたなど。三橋さんいかがですか。

【三 橋】日頃から自然史系の博物館では行っていることなので、博物館があればできあがることです。この事業で言えば北海道でも沖縄でもそうでしたが、市民科学者に声をかけました。上手くインクルードしていくことは徹底して意識しないとできないので、報告書に実施するということを書くの良いのではないのでしょうか。それ以上は実践あるのみだと思います。重要なのはなんとなく寄り添うだけでは解決にならないことです。圧倒的に技術は必要なので併せて重要だと思います。そういったことが周知されていれば声がかかったり、相手から声をかけられることもあります。

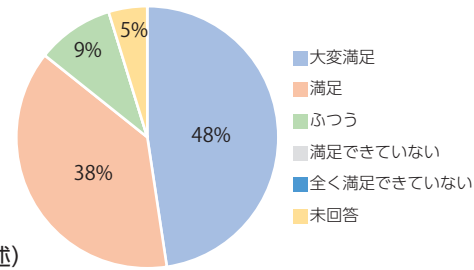
●パネリストからのレガシー事業の感想や今後の可能性についてのコメント

【三 橋】ネットワークを目的にネットワークを作るとそれは続かないと思います。例えば海藻の標本をとともきれいに作っていれば自然とネットワークができていくので、技術を磨くというのが極めて重要で技術がなければ続かないと思います。学芸員さんを自由にしてあげて技術研鑽研究ができるようにすることがネットワークにつながると思います。

【宮 原】三橋さんの樹脂標本作りに行きたかったのですが、日頃の業務と違いということで行けませんでした。道内に技術を身につけた人がある、頼める人が身近にいる、そういった人が広がっていく、こういうものもレガシーと言えるのではないかと

シンポジウム 参加者アンケート (一部抜粋)

Q. 本シンポジウムの事例紹介の内容はいかがでしたか？



理由 (自由記述)

- 各年度各地域の特性が活かされていたので。
- 科博の連携活動が分かったから。
- 地域の実情、特色、困難、工夫がよく分かったため。

思っています。

【栗 原】今後も続けていくために学芸員個人の技術を向上させないといけません。そして今回改めて思ったことは、一人は不安だということです。いろいろな人と情報共有ができ、こういった人がいるということを知り、本当にお会いできる機会を作れました。実践的に自分たちが身につけていき、それをまだ知らない人たちに伝承していくことがとても重要だと思いました。

【千木良】今考えているのは、まずは人と人が知り合うことだと思っています。この事業を通じて、知り合うことがどれほど大切なことか実感しました。県内の博物館に学芸員がいますが、必ずしも専門の学芸員がいるわけではありません。自分の専門分野以外の展示は周りから薦められても踏み出しにくいものです。踏み出すために、他の博物館の学芸員に相談できるといったのが、このレガシー事業の引き継ぐべきことなのだと思います。『人もお金も少なくとも、東になればなんとかなる』が私の標語となっています。

【望 月】みなさんがおっしゃったとおり、せっかくレガシーとして残していくのであれば、それを継承する人や文化がないと続かないと思います。今後も同じような活動を岩手県内のどこかの博物館で実施していただくなど、活動の輪が広がっていったらこれ以上嬉しいことはないと思っています。私自身もがんばらなくてはならないと考えており、そういった意味でも今回のレガシー事業に参加させていただいて私自身勉強することが非常に多く、実りの多い機会でした。ありがとうございます。

【小 川】みなさんに共通していることは、やはり人と人とのつながりが非常に重要であるということです。レガシー事業に関しては連携協働というのがキーワードですが、連携協働は目的ではなくて手段であり、目的に地域の課題や技術、標本資料に関する研究などの課題があって連携協働が生まれると思います。その部分がみなさんの言葉の端々に感じました。そのためには学芸員がコーディネート能力のような自分の専門に関わらず、色々なことに関わっていけるような心の余裕も必要なのかと思います。博物館が連携して広がっていくことによって、人とお金と予算がないところでどのように連携していくのが今後の博物館のあり方に非常に関係してくると思っています。博物館の社会的役割に現在求められていることですが、こういった社会的課題に対してすべて正解を出すのは難しいことなので、地域で何を最優先にして博物館同士、教育機関等が連携していくのか、本事業ではそういった課題に対し、新たにモデルで示すことができたのかと思います。私はこの事業では博物館が連携協働して新たな文化空間を作っていくようなイメージを持っているのですが、そういった博物館の新しい機能というものも、このレガシー事業でいくつかのモデルが提示できたと思っています。今年度を含めて4年間みなさんにご協力いただき、本当にありがとうございました。パネリストの方々以外にも、会場にいらっしゃる方にも講師やスタッフとしてご協力いただきまして、本当にありがとうございました。

Q. ご意見、ご要望など (自由記述)

博物館のレガシーを発展するため、今日の学校教育に応える「数理、統計」「国際化」への活動が必要と考える。私も高校時代「数学」「英語」に博物館はあまり関係がないと思い、行ったことがありません。実際は学べる余地が多くあります。

個々のパーソナルを活用できることがレガシーだと思った。人(＋企業、学会を含む)のネットワークというか、それを博物館が把握し、活用して行くことが良いのだと思う。

レガシー事業を通じて

「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」は、平成 28 年度から令和元年度にかけて、多くの協力機関・協力者のもとで実施を行ってきた。事業の評価においても、様々な観点からご意見を賜り、次年度の事業実施に反映を行ってきた。

令和元年度に行ったシンポジウムにおいて、平成 28 年度から平成 30 年度の3か年に携わってくださった評価委員の方からコメントを頂戴した。

●評価委員からのコメント

洪 恒夫 様

直接的な場面として、平成 30 年度の展示デザインの座学研修で「展示の意味」「展示の留意点」など総合的な内容を実施した。実際の展示を企画した学芸員が、制作した展示を見て、バックグラウンドを知り、その過程でグループ内での新しい評価を持てたことが成果として見られたと感じている。

ミュージアムは資源の再資源化をする場所であると考えている。地方の博物館と国立科学博物館が連携する中で規模や進路が広がる試みとしてレガシー事業は良いチャレンジであったと考えられる。今後は、理念や目的の連携を図ることでの便益を想定し、狙いを定めた上でのアクションが重要だと感じた。さらに PDCA のサイクルを見据えて、継続、改良、次へとつなげることが大切であると感じた。

高田 浩二 様

他業種と博物館がつながることの素晴らしさを感じた。科学系博物館（自然史、動物園、水族館）以外に沖縄では人文系博物館、さらにホテルとの関わりによって、違う分野に気づくこと、人と人との交差点ができたことがレガシーの成果であったと考えられる。

お金の切れ目が縁の切れ目にならないよう、今後の継続方法については、SNS を利用して関係者が何を実施しているか、どんな資源を持っているかといった情報共有ができると良いかもしれない。また、ミュージアムカフェを各地域で展開することも、継承の一つと感じている。

また、今回の事業では主眼としていない高齢者や低年齢者、障害者にも配慮することを目指して行えたら良いのかもしれない。



高安 礼士 様

地方の博物館では、現状博物館行政の弱体化、指導体制の変化などがある。本レガシー事業の大きな目的は「博物館機能の充実」とあり、従来の博物館機能として「調査研究（科博のノウハウ）の共有」また、新たな博物館機能として「コミュニケーション機能に係る教育普及事業の拡大化」が挙げられた。

今後に向けて重要となるのは、人材育成であり、事業のコンセプトを共通理解することが必要である。また、事業の明確化と共に、新たな時代変化にも対応し、博物館機能の拡充が必要となるだろう。人材育成、事業の明確化に対しては職員の資質能力の向上や利用者の参画性を高める工夫も必要になるだろう。

●まとめ

それぞれの委員からの評価においては、本レガシー事業による、博物館同士の連携の強化と、博物館と他の機関の連携の促進についての言及がある。これは、平成 28 年度からの本事業全体の大きな目標であり、一定の成果を上げたと考えられる。

この数年間においても、日本の社会的状況や、世界の状況は時々刻々と変化しており、そうした社会情勢の変化に応じた博物館活動の変革について、それぞれの評価委員からのコメントにあることに注視したい。

令和元年9月に開催された第 25 回 ICOM(国際博物館会議) 京都大会 2019 においては、博物館の定義の改正が話題に挙げられたことは記憶に新しい。また、この大会においては、持続可能性に関する言及や社会課題に関するテーマや発表が多く行われたことが印象的であった。この ICOM 京都大会 2019 に限らず、日本国内はもとより、世界のいたるところで様々な課題が林立していることは自明であり、こうした課題解決に対し、どのように博物館が連携協働して寄与するかという点も、これからの博物館の在り方を考える上で重要な論点となるだろう。

事業連携機関及び協力者一覧

●評価者

高安 礼士 (福岡市科学館 プロジェクトアドバイザー)
高田 浩二 (海と博物館 研究所所長)
洪 恒夫 (東京大学総合研究博物館 特任教授)
山崎 仁也 (前沖縄県立博物館・美術館 主任学芸員) ※平成 28 年度評価委員
石森 秀三 (北海道博物館 館長) ※平成 29 年度評価委員
緒方 泉 (九州産業大学地域共創学部 教授) ※平成 30 年度評価委員

●平成 28 年度

岩手県立博物館
岩泉町教育委員会
大船渡市立博物館
久慈琥珀博物館
三陸ジオパーク推進協議会
帯広百年記念館
沖縄県立博物館・美術館 の皆さま

●平成 29 年度

沖縄県立博物館・美術館
(一般財団法人) 沖縄美ら島財団
名護博物館
宜野湾市立博物館
沖縄市立郷土博物館
北谷町教育委員会
長野市立博物館
島根県立三瓶自然館 の皆さま

●平成 30 年度

北海道博物館協会
北海道博物館
北網圏北見文化センター
(一般財団法人) 沖縄美ら島財団
(公益社団法人) 北海道観光振興機構
小樽市総合博物館
三笠市立博物館
滝川市美術自然史館 の皆さま

●令和元年度

望月 貴史 (岩手県立博物館 学芸員)
千木良 芳範 (宜野湾市立博物館 館長)
栗原 憲一 (前北海道博物館協会 事務局次長(株式会社ジオ・ラボ 代表取締役))
宮原 浩 (江差町教育委員会 (学芸員))
三橋 弘宗 (兵庫県立人と自然の博物館 主任研究員)

●事業実施者

小川 義和 (連携推進・学習センター長)
濱田 浄人 (連携推進・学習センター連携推進課 課長)
濱村 伸治 (前連携推進・学習センター連携推進課)
飯岡 達人 (前連携推進・学習センター連携推進課) ※平成 28 年度
舟橋 位於 (前連携推進・学習センター連携推進課) ※平成 29 年度
寺嶋 はつき (前連携推進・学習センター連携推進課) ※平成 28 年度～平成 29 年度
八木 花香 (前連携推進・学習センター連携推進課) ※平成 30 年度
真鍋 真 (標本資料センター コレクションディレクター)
細矢 剛 (標本資料センター 副コレクションディレクター)
國府方 吾郎 (植物研究部 研究主幹)
矢部 淳 (地学研究部 研究主幹)
芳賀 拓真 (地学研究部 研究員)
池本 誠也 (科学系博物館イノベーションセンター長)
中島 徹 (科学系博物館イノベーションセンター 副センター長)
岩崎 誠司 (科学系博物館イノベーションセンター)
小川 達也 (科学系博物館イノベーションセンター)
大鐘 碧 (科学系博物館イノベーションセンター)
小竹 沙祐里 (科学系博物館イノベーションセンター) ※平成 29 年度～令和元年度

その他、たくさんの方々にご協力いただきました。

文化庁委託事業
「博物館ネットワークによる未来へのレガシー継承・発信事業」

平成28年度～令和元年度 成果報告書

令和2年 3 月 印刷
令和2年 3 月 発行
編集・発行：独立行政法人国立科学博物館
印刷製本：株式会社セイコー社



国立科学博物館

National Museum of Nature and Science